

第3分科会

南砺市



Nanto

南砺市井波総合文化センター

パネルディスカッション

「集落の暮らしを未来へつなぐ ～縮退する過疎集落に向き合う現場での取組と課題～」

【コーディネーター】

図司 直也 氏 (法政大学現代福祉学部 教授)

【パネリスト】

田口 太郎 氏 (徳島大学大学院社会産業理工学研究部 教授) 小玉 陽造 氏 (山口県岩国市 市民協働部長)

小島 公明 氏 (兵庫県朝来市いくの地域自治協議会 事務局長) 川島 尚子 氏 (高知県室戸市まちづくり推進課 集落支援員)

パネルディスカッション

コーディネーター

図司 直也 氏

法政大学現代福祉学部 教授

1975年愛媛県生まれ。東京大学農学部を卒業し、東京大学大学院農学生命科学研究科農業・資源経済学専攻に学ぶ。2005年に同研究科博士課程を単位取得退学。博士（農学）。財団法人日本農業研究所研究員、法政大学現代福祉学部専任講師、准教授を経て、2016年より現職。中山間地域等直接支払制度に関する第三者委員会委員長、(財)地域活性化センター・地域リーダー養成塾主任講師等、地域振興・人材育成に関するアドバイザーを歴任。専門分野は、農山村政策論、地域資源管理論。

主な著書は、『就村からなりわい就農へ』（筑波書房）、『地域サポート人材による農山村再生』（筑波書房）、『新しい地域をつくる』（共著：岩波書店）、『プロセス重視の地方創生』（共著：筑波書房）、『内発的農村発展論』（共著：農林統計出版）、『人口減少社会の地域づくり読本』（共著：公職研）、『田園回帰の過去・現在・未来』（共著：農山漁村文化協会）など。



パネリスト



田口 太郎 氏 徳島大学大学院社会産業理工学研究部 教授

1976年神奈川県生まれ。早稲田大学理工学部建築学科卒業、同大学院修了。博士(工学)。小田原市政策総合研究所特定研究員、早稲田大学助手、新潟工科大学建築学科准教授、徳島大学大学院准教授を経て現職。専門は地域計画。総務省これからの移住・定住のあり方に関する検討会委員、内閣府地方創生推進交付金のあり方に関する検討会委員、農林水産省長期的な土地利用のあり方に関する検討会委員などを歴任。自身も徳島県の過疎地域に移住し、生活者としての視点も持ちながら研究を進めている。主な著書に「まちづくりオーラル・ヒストリー」(水曜社、2005)、「少人数で生き抜く地域をつくる」(学芸出版社、2023)、他。



小玉 陽造 氏 山口県岩国市 市民協働部長

岩国市 市民協働部長
S38年 山口県の雪深い山間地域で出生
S59年 岩国市役所に入庁
しょうがい者福祉援護、観光振興、市民協働推進に長く携わる。
令和3年から現在の市民協働部長に就任



小島 公明 氏 兵庫県朝来市いくの地域自治協議会 事務局長

昭和55年生野町役場入職、平成17年合併により朝来市となり、平成29年3月定年退職。
平成30年5月いくの地域自治協議会事務局長に就任、同時期より集落支援員を務める。
地域内の各区自治会に対する活動支援や市の施設管理の受託等を行っているほか、旧鉢山宿舎を活用したゲストハウスの設立、運営にも取り組んでいる。



川島 尚子 氏 高知県室戸市まちづくり推進課 集落支援員

奈良県橿原市出身。北海道と神奈川県にも居住歴あり。
東日本大震災をきっかけに2014年から家族で高知県室戸市へ。夫は漁師となる。2017年から現在まで居住地かつ夫の勤務地でもある高知県室戸市椎名地区担当の集落支援員として「椎名集落活動センターたのしいな」を拠点とした地域活性化に取り組んでいる。
集落支援業務の一部としてたのしいなこどもクラブ、しいな遊海くらぶなど地域団体の立ち上げや運営にも主体的に関わり、プライベートでは、むろと地域猫の会、室小お話し会などのボランティア活動にも参加。ウクレレユニットいそもんとしても活動しイベントで演奏も行い他にも様々な地域活動に関わる。
各種観光ガイドやインストラクター、ライター業もっており特技は人と人をつなぐこと。

歓迎挨拶



田中 幹夫 氏

南砺市長

皆さんおはようございます。「全国過疎問題シンポジウム2023inとやま」第3分科会の開催にあたり開催市を代表し、歓迎の挨拶を申し上げます。

本日は全国各地から多くの皆様方に南砺市井波へお越しいただき、心から歓迎を申し上げます。また、関係者の皆さんにおかれましては、平素から過疎地域の振興に対し、格別のご尽力とご高配を賜っておりますことに深く感謝申し上げます。

私も昨日、全体会と交流会に参加し、「過疎」というキーワードの中で、全国から多くの方にお集まりいただき、色々な話を聞く機会に恵まれたことが、私にとっては大きな成果だと思っています。

我々の課題とするものは何なのか、そして宮口先生のおっしゃったメッセージは何だったのかを一晩考えて、今日の日を迎えました。

私は、この井波というまちから24、5キロ上流の利賀村というところに生まれ育ち、今も家があり、母親が住んでいます。小さな田んぼや畑があり、毎年同じように田植えをし、イノシシの防御の電気柵を張り、そして収穫が終わった頃に電気柵を外して、その間はずっと2、3週間に1回は草刈をしています。皆さんにこういう話をすると「お前のところは大変だな。」という声が聞こえますが、母親と2人で話をすると、「こんないいところはないぞ。向かいの山を見てみる。心がもやもやした時にこの山を思い出してごらん。」と言われ、本当に自分の生まれ育ったまちや地域の景色は立派だと思っています。

今日、南砺市のポスターが入口に飾ってありましたが、「都会は人がつくり、田舎は神がつくる。」このメッセージはイギリスの詩人の言葉です。私は南砺市のまちづくりにおいて「一流の田舎をつくりたい。」と言い続けて、合併して18年、15年間市長をさせていただいております。皆さん、一流の田舎を全国につくろうじゃありませんか。一つ一つの地域が一流の田舎だと誇らしく語れるような地域をぜひつくっていきましょう。

南砺市もまだまだ道半ばですけれども、人口減少という課

題に対し、広大な山林、そして平野部を有する我々一人一人が気持ちだけでも負けないように、明るい未来を若い人たちに繋いでいくな、そういう想いでこのシンポジウムを開催させていただきました。

今日1日、ここで新たな出会いと学びがあるかもしれません。また、少しの時間ですけれども井波のまち、そして世界遺産の相倉合掌造り集落もご視察をいただくとお聞きしております。皆さんにとって本当に有意義な1日になりますように心から念じ、そしてそのことが日本の過疎地域の元気に繋がるように祈念を申し上げまして、私からの歓迎のごあいさつとさせていただきます。みんなでこの日本を守っていきましょう。よろしく申し上げます。ありがとうございました。

「集落の暮らしを未来へつなぐ

パネルディスカッション ～縮退する過疎集落に向き合う現場での取組と課題～

図司／皆さんおはようございます。これから第3分科会を始めます。よろしくお願いします。テーマとして「集落の暮らしを未来へつなぐ ～縮退する過疎集落に向き合う現場での取組みと課題」とつけていただいております。私も例年は、今、朝日町と氷見市で行われている優良事例表彰の委員として、報告会の司会をよくさせていただいているのですが、今回はこのような形で、パネルディスカッションの進行役を務めさせていただくことになりました。最初にこの分科会のねらい・主旨のところからお話をしてみようと思います。例年ですと、パネルディスカッションも県内の過疎の自治体の皆さんが企画していただくケースが多いのですが、今回は新しい取り組みになっておりまして、国の過疎対策室と全国過疎地域連盟の企画のもとに立ち上がった分科会になります。

そういう意味で集落対策に少しフォーカスしながら、具体的には集落支援員の仕組みに着目しながら、理解を深めていきたいと考えております。

といいますのも、集落支援員の仕組みが始まりまして、概ね15年近くになってきています。発端としては、2008年の過疎問題懇談会の中で、集落対策として人的支援を組み入れていこうという画期的な提言が出されて、それに伴って集落支援員という仕組みが導入されました。ただ、人的支援としては、地域おこし協力隊はかなり表に出るケースが多いのですが、同じ時期に始まった集落支援員は、どちらかという地域に根差した黒子役の性格もあって、その役割とか働きぶり、或いはそこにおける手応えとか課題というものが見えづらいというところが正直なところかなと考えております。よく人的支援の研修会を田口先生とともにお手伝いさせていただいていますが、協力隊の研修会は充実しているけれども、集落支援員の研修会は、まだまだじゃないかみたいなお声もたくさん頂戴しております。それは実態がなかなかとらえにくいという性格上のところもあるかと思えます。

そういう意味では、今回パネリストとして4人の方にご登壇をいただいておりますが、田口先生は我々と近いところで、少し研究者目線のところから、現場を読み解いていただきます。小玉部長には行政の立場から、現場の方でうまく支援員の皆さんに活躍してもらう場づくりが非常に大事になってきますので、その辺のお話を小玉部長から頂戴しようと思っております。

小島さん、川島さんは現場で支援員のお立場として、それぞれ自治協議会、集落活動センターのような組織をサポートする形で入られています。いろんな形の支援員の関わり方がありますので、今回はお二方からその活動をご紹介いただき、ご苦労などをお聞かせいただきながら、集落支援員という仕組みを通して集落対策を考えていくところをねらいど

ころに、会場の皆さんと一緒にいろいろ議論していきたいと思えます。

それでは、前半は4人の皆さんからご報告をいただこうと思えます。最初、田口先生の方からご報告を早速ですがよろしくお願ひします。

田口／徳島大学の田口と申します。今日はよろしくお願ひします。

私は研究者として、地域でいろんな活動をしている一方で、徳島県の人口2,000人の小さな村に移住しております。移住する以上は、地域の事は全部やろうということでいろんなことをやりながら、生活をしております。そういう生活をしていると、今まで私たちが見ていたまちづくりって本当にリアルなまちづくりなのか、に疑問に感じることが多々ありました。というのは、我々研究者として、いろんな地域に出かけていくと、その地域のキーパーソンの方々にお会いできるのですが、普通の人たちとなかなかお会いできないんです。地域の9割5分ぐらいは普通の人たちで、ごく一部のキーパーソンの人たちの動きを地域づくりの動きとしてとらえることが本当に妥当なのか、ということを考えています。

私が住んでいる集落は11世帯で、私より若い人が1人もいない、うちの家族しかいないという集落です。このコロナで3年間いろんなものが止まって、今立ち上げに相当苦労している状況です。そして、そういうことを考えていると、単純にまちづくりで盛り上がっていけばいいということではなく、生活をいかに下支えしていくかということもすごく重要だなということを実感として思っております。

そういうときに、いわゆる地域おこし協力隊のキラキラしたもの以上に、集落支援員の皆さんが、実直に地域の皆さんと関わり合いながら草の根的な活動をしていくということが、すごく大事だと思っております。地域の中でよく衰退、衰退と言って、衰退の理由は何ですかという、「人口減少です。」と言いますが、本当に人口なのかということをごどこかで考えなければいけません。

例えば今回のコロナで、3年間いろんなものが止まってそこからの立ち上げが難しい。人口はそこまで減ってないけれども気分が下がってしまったということの方が大きかったりするわけですね。

だからもう一度、地域の衰退とは何かということをお考え直してみる必要があります。人口は二次曲線的に減っていき、だんだん傾きが弱まっていくのですが、地域を運営・維持していくのに必要な労力というのは人口と同じように減ってくれるかという、減ってくれません。さらに最近では価値観が多様化しており、地域の活動にあまり関心がないという人も、田舎の方にきても結構増えてきている印象があります。そう考

えると、少子高齢化、人口減少で担い手が減っている以上に、価値観の多様化も後押しして担い手がさらに減少し、地域の維持に必要な労力と担い手の数とのギャップが広がり、これが地域にとっての衰退感に繋がっていると考えています。

一例で言うと、昔は10年15年で辞められた消防団が、今の若い人は消防団に入ったら多分一生辞められないんですよ。そういう状況が、地域の中の負担感みたいなものを増してしまっている。だから結局、地域づくりって何だろうかって考えると、この隙間、ギャップみたいなものをどう埋めていっていかってということだと考えるのです。

このギャップは、例えばよくメディアとかで取り上げられるキラキラしたまちづくりだけでは、必ずしも埋めきれないわけで、生活の中のこの負担感みたいなものをどう解消していくかということは結構大事なことだと思っています。

地域づくりとかまちづくりは定義が非常に曖昧で、それぞれ集落支援というの、どこを目指して支援するのか、地域おこし協力隊が起こすというのはどういう状態が起きた状態なのか、地方創生だってどうしたら地方創生しているのかということがほとんどわかりません。基本的には、終わりなき取り組みだとは思いますが、私は、地域の問題点に対して何らかの改善活動をしていこうということが大きな地域づくりの流れかなと思っています。やはり今は価値観が多様化していたり、自治体も広域化してしまって、財政もなかなか苦しいと考えると、戦後、行政頼みの地域づくりが進んできた中で、もう一度、考え直す必要があるかなと思っています。

国の地方創生の話を見てみると、自立の「立」という字が5原則の中の一つに掲げられて、自主財源とか、自分たちで、ということと言われるんですけども、そうでもないんじゃないかと私は思っています。それこそ今日は集落支援員の皆さんがテーマですが、地域おこし協力隊の皆さんもいらっしゃいますし、関係人口の皆さんもいらっしゃいますし、いろんな人たちが地域に関わるようになってくる中で、大事なことは、自分が独立的に立つというよりは、いろんな人たちを上手に使いこなす地域でいられるかどうかです。

僕は「律」という字で使っているのですが、コントロールをすること、そして、それによって地域の自治力をどう再生していくかということが、大事なんじゃないかと思えます。何で自治力なのかというと、行政の団体自治と、住民活動が地域をずっと支えてきたんですが、両方とも昔は充実していたものが、行政は財政も苦しくなり、合併もしていく、そして最近では人員不足ということもあり、ある程度縮小せざるをえない。そして住民は少子高齢化によってどんどん減っていく。昔はオーバーラップ出来ていたものが、最近この間に隙間が生まれてしまっています。

ここを私は「自治の空白」と呼んでいますけれども、これが広

がっているのが現状です。これは今後、残念ながら広がっていく一方なんです。この広がっていく部分をどう埋めるかということが地域にとってすごく大きな課題なんじゃないかと私は考えています。

埋め方をどうするかなんですけども、何種類かあると思っています。行政は最終的には、徹底的にセーフティネットをしっかり守っていくことが、最大のミッションだと思います。その間どうするか、例えば移住者を集めてくる、関係人口を集めてくる、或いは地域に貢献してくれるような企業を呼んでくる。そういう点もあるかなと。ただそれだけでも埋まりきらないので、最後は、例えばICTの活用であったり、集落活動を棚卸しするとか、全体のパイを減らしていくこともどこかで行っているかなと思っています。

ただし、ここでの効率化というのは、集落を統合していきましよう、という話ではありません。このコロナ禍で、我々はオンラインコミュニケーションというツールをかなり手に入れました。私の家の隣に住んでいる80歳のおばあちゃんも、コロナ禍で孫に会いたいがためにスマホを入れて、LINEを入れたんです。LINEで、お孫さんの顔を見ていて、あたかも会っているよだとすごく生き生きしゃべってくれる。こうしていくとむしろコミュニケーションが活発になるかもしれないと前向きにとらえましようということですよ。

決して効率化して集落を統合という話じゃなくて、今までは統合しか選択肢がなかったけれども、分散していてもネットワークさえあれば何とかできるということが証明されたのがこのコロナ禍だったんじゃないかと私はとらえています。ただこれも、率先的に入れようとしている地域と、いやいや高齢者は無理だよという地域の二極化が実は進んでいて、これはちょっと危険だなと気にしているところです。

地域には、いろんな人たちが出入りしています。関係人口の施策もあるし観光客もいるんです。大学も今、積極的に地域貢献しようとしています。ただ、こういう人たちとつき合っていると、地域の方々もお疲れになっちゃうんですね。そういう意味で簡単に言うと、今地域はモテてるんです。いろんな人たちが来たがっている。そして、モテている人達は何をしていいかということ、面食いしていいんですよ。ということは、自分たちにとって、良い仲間を捕まえるチャンスなんですよ。誰でもよいというと、もう自分がただ疲れちゃうんですけど、いろんな人たちが来てくれるんだから、良い仲間を捕まえて、自分たちの地域を良くしてくれるような仲間って誰だろうかっていうようなことを、地域の皆さんもきちんと考えていく、そういうことをしていくと、すごくその地域の体力にあった、或いは地域の身の丈に合ったようなサポートを得られやすいんじゃないでしょうか。そういう意味でいうと、その地域と協働してくれるか或いは地域に貢献してくれるか、或

パネルディスカッション 「集落の暮らしを未来へつなぐ ~縮退する過疎集落に向き合う現場での取組と課題~」

いは地域と高めてくれるかというようにところで移住者とか企業とか関係人口を見ていくことはすごく大事なのではないかなと思います。

もう一つは、今までは住民至上主義みたいなところがあって、移住の後に、定住が必ずついてくる。私も移住者だからよく「結局定住するの？」みたいなことをよく言われるんですけど、それは正直わかりません。ただ、きっと定住しなかった私の愛はここにありますがよって言う気がするんです。特に私の場合、息子、娘が地域で育っているので、彼らにとってふるさとであり続けるわけですね。そこに住み続けることがそこまで大事かという、今これだけネットワークの時代ですから、仮に離れたとしても、きちんと繋がっているということがすごく大事なんです。例えば離れた先が近くであれば、通うこともできます。現に地域の活動は外に出ていった人たちがサポートしているということは多々ある。だから、現状として、地域を支えているのは住民かという、住民が中心ではあるんですけども、もっと多様なんですね。住民の中でも支えていない人もいれば、住民じゃなくても支えている人たちもいる。こういう外にいる人たちの力をどう上手に使いこなすか、或いは、地域からいろんな理由で出ていってしまう人たちをどうやってその地域に協力してもらえようにするかです。

僕はこれを「重力場」と呼んでいますけども、重力場の中に収めておけるかどうかということが、地域にとっては大事です。今までは住民で支えてきた地域というのがあるので、どうしても何でもかんでも住民であることが大事となってしまうのですが、地域から出ていった人たちも結構地域のことを気にしていますし、お祭りの時は戻ってきます。こういう人たちを出ていったから裏切り者、と切り捨ててしまうとそれで終わってしまうのですが、外に出ていった人たちの力も上手に使っていきこうというような機運を作っていくと、地域は変わっていくのではないかと私は思っているんです。今まで人口で地域を見てきたのですが、結局、地域を担ってくれる人たちがどこにどれだけいるかということに、目線を切り換えていけるかどうかがすごく大事なかなと思っています。だから、単純に人口を再生するのではなくて、自治力を再生することができれば、仮に人口が減ってしまっても地域は守れるんですね。人口が維持できていても、自治力が低下してしまう。

地域にコミットしてくれるような皆さんがいなくなってしまうと、簡単に言うと都市化してしまうと、どうしても地域はなかなか立ち行かなくなってしまう。

よく、地域の中でも、支所や役場があるようなところの周辺が意外と結構、しんどくなってきてしまっているというの、おそろくちょっと都市化が進んでしまっている影響でしょう。なかなか地域の人が活動に向かっていかなくなると、地域の体力がぐっと落ちてくる。「自治力」とは何で規定

されるかという、簡単に言うと「企画する力」、要は自分たちの問題点を考えてどういう手を打てるかという比較をする力と、あとは「実行する力」です。実行する力というのは、関係人口とか大学生とかいろんな力がありますが、一番落ちているかもしれない危機感を持っているのは、企画をする力です。

昔は地域に行くと、地域の状況とか問題点を自覚して地域の皆さんがいろんな知恵を絞って、これをやったら良いのではないかと、こういうお祭りをやって人を集めてこようと、そういう企画をしていたんですよ。ところが財政も苦しくなると、だんだん補助金頼みになってきてしまうところがある。そこでもう一度企画する力を地域がどう取り戻せるかどうか、その結果としていろんな仲間をつかまえていくことができるかどうか大事です。

企画をしながら、ここで使える仲間とはどういうタイプの人たちに協力してもらおうかとかいうことを考えていけるかどうかです。例えば、地域から出ていってしまったけど、地域のことを考えてくれるような人たちの知恵を借りるということもそうです。

単純に地域にほとんど来ることがないような東京の人の知恵を借りてもなかなか地域の人たちが受け入れられないんですね。どうしてかという、例えば、初めて会った人たちから「お前の人生どうする？」と言われてもイラっとくるだけなんですけど、昔からの幼なじみに久々に会って「お前それでいいの？」と言われると、何となく一晩、気になってしまう。ここでは信頼関係があるかどうかということが大事で、信頼関係があるような仲間を、地域の外にどれだけ作っていけるか、ということこれから地域の中で考えていかなければいけません。こういうネットワークをすごく持っているところは、地域をいろんな人たちが支えてくれ、いろんな人たちが自分たちの役割を發揮していく。こういうことをうまく機能させると、私は人口が少なくても人数が多い社会がつかれるのではないかなと思います。これを「少人口多人数社会」と呼んでいるのですけれども、こういう思考の転換と、そこにどう仲間がいるかどうか、しかもこれは単純な仲間ではなくて信頼できるような仲間を作っていけるかどうかということがすごく大事なかなと思っています。

一方で、冒頭に申し上げた通り、地域づくりとは何だろうと考えたときに、地域の皆さんの中にはすごく積極的な人もいれば、なかなか積極的にならない人たちもいるんですね。この図で言うと、上の赤い線がすごく注目される地域づくりの流れなんですけど、実はその下にはオレンジ色の点線があります。地元の人たちがなかなか動き出さない中で、地域づくりをサポートするとなると、この上の赤いラインを上へ押し上げようという気持ちが働くのですが、実は地域全体を守るた

めには、下のオレンジをどう押し上げるかということの発想が、すごく大事だと私は実感として思っています。こういうことをきちんと考えていくことができれば、その先に明るい未来があるかもしれないという気がしております。

集落支援員の皆さんという人たちはどういう役割かという、おそらく我々のような専門家と違って、地域の前向きな人も、後ろの不向きな人も見ているわけですね。こういう人たち、しかもこういうシンポジウムとかいろんな知見をお持ちになっていただければ、そういう視点を持ちながら、この地域にとってどういう働きかけが有効なのかということを俯瞰的に見て、小さな底上げをやっていけるかどうか。特に、私も心がけてそういった人としゃべるようにしていますけど、日が当たっていないけどもいい人ってたくさんいるんです。日が当たっていないけど、いろいろ考えている方がたくさんいらっしゃる。こういう人たちにきちんと話を通していかとか、きちんとサポートしていけるような状況ができてくると、下がぐぐっと押し上がってくる、こうするとチームとしては非常に強くなってくるんです。こういう動きが、集落支援員という、地味ではあるんだけど地域に根差した人たちの活動として、すごく大事なんじゃないかと思えます。ありがとうございました。

図司／田口先生ありがとうございました。集落対策のねらいどころであるとか、最後の話は、外の力も上手に使う中で、集落支援員という立場を、どういうふうに組み入れていくのかとか、その視点から、いろんな示唆をいただいたかと思えます。パネルの後のディスカッションにつないでいきたいと思えます。ありがとうございました。

続きまして、岩国市からお越しいただきました小玉部長から、行政の立場から見えた集落支援の仕組み、或いは集落対策のお話をいただければと思います。よろしく願います。

小玉／岩国市から参りました、市民協働部長の小玉です。

私からは、行政の視点が主となりますが、集落支援員制度の導入、運用にあたっての留意事項及び地域での取り組み状況や課題などにつきまして、事例を踏まえまして、ご報告させていただけたらと思います。あくまでも岩国市での取り組みですので、ご参考程度で静聴ください。

まずは、岩国市の紹介から参ります。岩国市は本州の最西端山口県にありまして、経済圏は広島市と一体のまちでございます。人口は約13万人で、他に住民登録のない軍人軍属が1万人以上おられて、住民の1割強がアメリカ人という国際色のある町でございます。岩国市の特徴ですが、多様な顔のある町、というふうによく言われております。特徴とされるのが、工業、コンビナートの町であること、アメリカ海兵隊海上

自衛隊基地の町であること、そして、観光の町、城下町としての顔でございます。観光振興に長く携わっておりまして、私の紹介するパネルの中には随所に観光のPRが入っております。

地域づくりの困難性についてですが、現在の岩国市は平成18年に周辺8市町村が合併し誕生いたしました。広大な行政区域を有していますが、面積の9割は山間地になります。市街地まで道のりで70キロを超える集落もあれば、港から1時間を超える離島、有人離島が3島あります。地域づくりの随所に影響する基地問題もあります。そして、県平均を上回る高齢化率の高さ35%です。小規模高齢化集落の多さは住基ベースで150ですけれども、実態的にはおそらく200以上の集落が、小規模高齢化集落になっております。このように、多様な課題が山積しているのが岩国市の現状です。

集落の持続的発展に関して、本市におきます集落支援、それから中山間振興の推進体制について触れておきます。所管は本庁にあります中山間地域振興室が、旧行政区ごとに設置しております総合支所と連携しながら進めております。集落支援の推進計画として、中山間地域振興基本計画を策定しており、計画の根拠は、中山間振興施策基本条例によります。

本市の集落支援員制度の特徴でございます。ここから集落支援各論に入って参りますが、平成22年度から導入致しております。専任方式です。会計年度任用職員として、行政の所管部署に配置しております。採用方法は公募、市では外部人材の活用として位置付けており、地元採用にこだわらず募集・採用しております。現状の支援員すべてが集落外からの採用で、市外からの通勤者、移住者の方もおられます。現在の任用数は集落支援員として7名、別途、中山間地域におけるUターン促進のミッションを付加した地域づくり相談員が2名の計9名でございます。

集落支援員のサポートと育成についてですが、定期的な情報交換会や研修会を実施していますが、岩国市の特徴的なものは、地域おこし協力隊との合同の意見交換会、研修会を設けていることです。これはミッション内容が、やはり地域おこしと集落支援員、重複する部分がありますので、相互の連携が大事だと考え、合同の研修会を設けております。また、市民活動支援センターとの連携にも注力しております。この市民活動支援センターとの連携では、支援員側は、ワークショップや組織づくりのノウハウを学ぶことができ、センター側は、テーマ型市民活動が手薄な中山間地域へのアプローチとして、相互にメリットを有しております。

サポートにおきまして、大事だと考えておりますのは、業務に関する愚痴をいえる場、吐き出せる場を作ることです。

集落支援員による集落支援の実際でございますが、本市の

パネルディスカッション 「集落の暮らしを未来へつなぐ ～縮退する過疎集落に向き合う現場での取組と課題～」

集落支援員は、集落外の人材が主であるため、採用後に対象地域の実情や役割について、事前学習いたします。そこから集落の声を集める活動、いわゆる戸別訪問による集落点検、それからアンケートなどを行い、まずは集落の人たちに知っていただき、ラポール形成、信頼関係の構築を図る。これが重要だと考えております。それから、話し合い活動、これは新たなコミュニティの場を形成することであると認識しております。わいわいと和める新たな場づくりに努めながら、別途、定期的に集落支援だよりを発行しつつ、地域の方々の住む思いを掴めたところからいよいよ集落の未来について考えるワークショップを開催いたします。回を重ね、意思疎通を図りながら、地域計画である夢プランを策定、そして行政、集落、その他の主体との協働による地域づくりの遂行に着手いたします。

一つの事例から本制度を考察してみたいと思います。事例は、中国山地にある集落で、世帯数92世帯、人口141人、高齢化率69.5%、人口ちょっと多いかなと思うんですが、実態は、小さな集落を束ねた地域ということになります。持続的な発展を目指して集落と行政の協働が上手く機能している事例でございますが、まず集落点検アンケートを実施し、報告会を開催しました。その後から、話し合い活動を継続して行い、集いの場を形成、集いの場の定着を見ながら集落のにぎわい創出を目指し、話し合い活動からワークショップに移行、地区夢プランを策定、成果の指標となる三つの目標を定めました。そこから集落と行政との協働による地域づくりがスタートします。地域、集落が目指すところは、集落の持続的な発展のためのにぎわいの創出と決めました。ワークショップ夢プランの作成風景でございますが、1年間かけてワークショップを開き、夢プランを作成、地域プランである地域計画である夢プランを作成しました。この夢プランに沿った地域づくり、にぎわいの創出には、拠点となる施設がどうしても必要ということがありました。しかし地域にある既存の、活動拠点は廃校舎を再利用したもののため、老朽化もあり、機能性に大きな問題がありました。そこで、新しい活動拠点をオープンさせました。ここは行政の本気度を示すものとして、評価できるものだと思います。

定住人口の増加に向けた移住応援、三つのプランニングの中の一つでございますが、定住人口の増加に向けた移住応援、定住人口の増加に向け、地域住民による移住応援団を結成、市の空き家情報登録制度を活用し、空き家調査、空き家バンクへの登録を行ったほか、移住者への生活サポートを地域の方が行っておられます。

朝市、それからキッチンのオープンです。地産品の販売促進活動として、朝市と飲食店をオープンさせました。メニューでございますが、毎週土曜日午前中の定時オープンのほか、イ

ベント開催時など機会をとらえてオープンしております。飲食メニューは週替わりのため、旬の野菜工夫を取り入れたことで、市外からのリピーターも多くあり、毎回完食、完売となっております。

多彩な催し、新しいにぎわいの創出、交流人口、関係人口を拡大することで、集落の魅力を発信し、ファンを増やし、里帰りの促進や移住意向の醸成を図りました。これらすべて新しく創出したイベントでございます。

目標達成状況です。活動拠点がオープンして以降の3年間の成果指標を定めておりました。それぞれの項目の目標と達成状況ですが、「交流拠点施設での地域産物の販売額」は、目標1,843,200円に対して、実績4,446,220円と目標を大きく上回ることができました。また、空き家バンクの登録、移住応援団の結成、関係人口の増加など「定住人口の増加」は、目標2人に対して、実績7人と、これも目標を大きく上回ることができました。さらに、朝市・キッチン・イベントの開催など「地域産物の販売促進活動」は408回という目標に対して、406回の実績となり、ほぼ目標を達成したということができると思います。全期間がコロナ禍に見舞われておりましたので、控え目な目標ではあってもこれは、達成はまず無理だろうと踏んでおりましたが、関係者の冷めない熱意により全ての目標が達成することができました。

遂行にあたり活用した事業、財源でございますが、農林水産省の農山漁村振興交付金を活動拠点のリニューアル、廃校舎の解体、交流館の新築に活用していました。飲食、物販販売、キッチンの整備につきましては、県の元気生活圏活力創出事業補助金、それからそれ以外の活動支援、それから周辺整備、移住定住支援に関しましては、市の独自事業である各予算・事業を活用いたしました。こういった財源の活用や制度の適用、そのプランニングは当然ですが、行政の手腕にかかっているものです。

集落の変化ですが、地域コミュニティ・集落間ネットワークの強化、関係人口の増加・賑わいの創出、ファン・リピーターが増えました。

営農意欲の向上に関しましては、これを地産品として販売すること、そして移住された方が農業に興味を持っておられたことで、耕作放棄地の減少にも繋がりまして、持続可能で誇りを持てるふるさとづくりが現在も進行形で進んでおります。何より地域の方の声ですが、子や孫が里帰りする機会が増えたということが一番の喜びとおっしゃっている方もおられました。

次にこれは簡単な紹介になりますが、試行錯誤中の事例でございます。少子高齢化の中で、担い手不足やコロナ禍もありまして、価値観や行動形態も変化し、岐路に立つ地域行事があります。岩国市も同様でございます。

ある集落では、縮小開催していた伝統行事の復活を決めました。4年ぶりに地域行事の再開を決めましたが、担い手の負担増や、住民の意識変化が大きな課題となりました。さらに地域行事が文化財指定ということで、負担感軽減のための所作や仕様、手順等の変更が困難という課題があります。伝統を継承したい、ふるさとの宝を守りたい。苦境にある地域行事の存続の問題に取り組んでいる集落支援員が岩国市にあります。現在進行形のため、まだ結論は出ておりませんが、画面でもって岩国市こんな地域行事があるんだなっていうことを知っていただければと思います。

まとめに入ります。集落支援員の活用にあたりまして、私市民協働部長が所管部署や担当職員に注意喚起している内容でございます。あくまでも岩国市の任用形態における事項です。参考程度でお聞きください。

まず集落支援員はプロフェッショナルではないです。集落での事前の地ならしは行政の役割であって、これを集落支援員に丸投げするのは無謀ですし、無責任です。行政による集落との事前調整が、職員の人材的・業務的に難しいのであれば、ミッションの重要性にもよりますが、岩国市であれば、独自事業であります地域づくりワークショップ事業というのがあります。総務省の施策であれば、地域創生施策にありますアドバイザー制度などの活用を図るべきだと思います。話し合い活動を経て形作られるプラン、地域計画を実行に移せる仕組みや財源制度を具体的に想定しているでしょうか。行政の力量の部分ですが、これを想定できていないと、集落支援員の活動は、集落点検、話し合い活動、アンケートを延々と繰り返すだけになります。この点で岩国市の場合は、地域づくりに関して比較的使い勝手の良い独自事業予算を設けております。

集落支援員の導入にあたっては、集落支援員、行政組織、集落の役割をよく整理され、常にミーティングとサポートができる体制を整えておくことが重要です。これができていないと、集落支援員や地域おこし協力隊は単なる行政事務の補助員や現業の作業員になってしまいます。結果、長続きしません。これはすべて本市の経験上からの感想です。簡単なことではありませんけれども、集落の人たちの想いを置き去りにしない支援、集落支援員を孤立させないサポート、そのような行政の姿勢が大切だと思います。

まとまりのない話でしたが、岩国市での集落支援施策の紹介でした。機会がありましたら、ぜひ1度岩国市へお立ち寄りください。中山間地域の集落には、現代社会において困難かつ多様な課題を克服することが期待される多くの強みと可能性があります。地域事情は様々ですが、持続可能な地域づくり、集落への支援、一緒に頑張りましょう。終わります。

図司／小玉部長ありがとうございました。最後の一つ前のスライドですかね。行政の補助員、現場作業員にしないという、赤字の部分に非常に想いが込められていたんじゃないかと思います。今日の一つの論点で後程広げたいと思います。ありがとうございました。

続きまして、支援員としての活動、立場からの現場のご報告、活動の報告が中心になるかと思えますけれども、まず朝来からお越しいただきました小島さんよろしく申し上げます。

小島／兵庫県朝来市のいくの地域自治協議会の小島です。私からはいくの自治協の取り組みを紹介させていただきます。

最初に、朝来市の位置ですけれども、兵庫県のほぼ中央部です。雲海で有名な竹田城、生野銀山のあるところ。平成17年に、朝来郡4町の生野町、和田山町、山東町、朝来町が合併してできた市です。朝来市では平成の合併に合わせて行政範囲は大きくなって、住民自治を強化していく地域自治のシステムとして、「地域でできることは地域で」を理念に、朝来市内の概ね小学校区単位に地域自治協議会を設置し、市内には11の地域自治協議会があります。その中のいくの地域自治協議会は、旧生野町にあり、朝来市の南部に位置するところですが、令和5年4月現在12の自治会で構成され、人口2,455人、世帯数1,100、高齢化率42.4%の地域です。旧生野町には奥銀内地域自治協議会と二つの自治協議会があります。

次に生野の紹介ですけれども、一言で言いますと鉱山のまちです。明治元年に日本の近代化、殖産興業を担う日本のモデル鉱山とするために、明治政府は官営鉱山としてお雇い外国人を招聘し、近代的なモデル鉱山を作り上げて、日本の近代化の礎を構築してきたところです。生野にはフランスからお雇い外国人延べ20数名が明治元年から明治17年ほどまで住んでいました。生野にはたくさんの鉱山関連の遺産、文化が残っていますので、平成26年には鉱山の町としては最初の文化庁の文化的景観の選定を受け、平成29年には生野鉱山の関連遺産等が「播但貫く銀の馬車道鉱石の道」として日本遺産の認定を受けております。

ここからはいくの地域自治協議会の紹介ですが、年1回の総会を開催して、予算、活動計画を決めます。そのもとには運営委員会があり、自治協議会の役員のほか、地域内の自治会の区長や、事業部長などの理事で構成されて、毎月1回開催して事業の進捗状況を確認し合っています。また役員会は毎月1回以上開催しまして、事務局はこれらの会議等の調整・進行を担っています。事業部は五つの部会に分かれて活動を行っているところです。

現状と課題ですけれども、旧生野町時代には鉱山もありまし

パネルディスカッション 「集落の暮らしを未来へつなぐ ～縮退する過疎集落に向き合う現場での取組と課題～」

たので昭和32年には人口1万2000人でしたが、現在では3200人あまりとなっています。生野鉱山は昭和48年に閉山となり、その後企業誘致なども行いましたが、社会情勢の変化を受けて、工場閉鎖などもあり、企業城下町の特徴であります、著しい人口減少と高齢化で、地域の活力低下というのが課題となっています。いくの地域だけで見ますと、11年前から人口で721人の減。高齢化率も32%から42%となっています。その一方で空き家の増加が顕著で、令和元年には171件です。現在ではもっと増えていると思っています。

このような現状の中で、昨年、活動指針となる地域まちづくり計画を、10数年ぶりに改定して、「鉱山文化を活かし、人が輝くまち 生野」を、まちづくり目標としました。自治協の主たる活動財源は朝来市からの地域包括交付金を財源としています。会員からは、1世帯300円をいただいています。自治協の取り組みですが12の自治会への区活動補助や、ごみ集積施設の整備や、防犯灯の整備に対する補助のほか、活動財源ともなります市の施設や公園管理の維持管理なども行っています。

部会の活動ですが、みどり部会は生野を花いっぱいにするということで寄せ植えなどの活動のほか、河川などの草刈作業なども行っています。いきいき部会では地方鉄道路線である播但線の利用促進のために、播但線利用とウォーキングを合わせたウォーキングトレインの実施や生野駅の待合室で播但線の写真展示なども行っています。あんしん部会は定期的に青パトによる子供たちの見守り巡回を行っており、まなび部会では、オンライン研修や子育て支援のために不要となった子育て物品のリサイクルバザーなどを実施しています。以上が主な活動です。

次に地域おこし協力隊と取り組んでおりますゲストハウスの紹介です。

朝来市では希望する自治協に地域おこし協力隊を派遣してくれていますが、鉱山文化遺産の維持を含めて、増え続ける空き家等の何らかの活用事例ができないかということで、令和元年度に地域おこし協力隊を募集しました。生野鉱山のひと文化をつなぐ職人とうたって、空き家をアトリエ、職人工房、ゲストハウスなどを研究実施してもらえないかと募集しましたら、南アフリカ出身のネル・レハンが応募してくれました。レハンは生野に来るまでは札幌でALTをしていましたが、双子の兄も隣まちで地域おこし協力隊になったこともあり、いくの地域自治協議会に令和2年8月に着任しました。

レハンの提案として空き家を活用してゲストハウスができないかということで、町内の各所を見たのですが、一番投資が少なく取り組めるのが文化的景観の重要構成要素でもあり、朝来市の文化財にもなっております旧鉱山職員宿舎でし

た。生野では一般的に甲社宅という建物です。この建物は明治9年に建築されたもので、当時の生野鉱山の役員クラスが住む官舎です。10年ほど前に朝来市が改修再生した建物で4棟あり、そのうち2棟が宿泊体験もできるように整備されていました。朝来市役所とも協議・調整し、市の施設ですので、条例改正も行っていただいて、旅館業の免許も取得し、令和3年8月に、イクノステイというゲストハウスをオープンすることができました。

イクノステイは自治協の事業として始めましたが、当初は明治9年の古い建物です。1ヶ月に2組、4人ほどの利用があったらいいと思っていたんですが、結果的には令和3年度には38組、104人の利用があり、令和4年度は105組、286人、令和5年4月から9月までは104組、257人の利用客があります。基本的には非接触型のゲストハウスで、レハンが窓口となっていますので、コロナ禍が明けてきた令和4年の11月ごろからは、外国人の利用客が増えてきています。

思わぬ収入も出てきましたので、地域の活性化とあわせて、レハンの将来の生活基盤にもなればということで、令和4年度に運営委員会の中から法人化の特別委員会を設置して協議していただきました。令和4年12月には自治協の臨時総会を開催して、設立する会社に自治協が出資するという決議を受けて、いくの地域自治協議会が、大株主となったクリエイティブ生野株式会社を、令和5年2月に設立しました。この会社の目的は生野地域の創造性豊かで持続可能な地域づくりに資するというを目的とし、偕和の精神で地域のために尽くすということを理念としています。

このように、イクノステイが当初の見込みを超えて利用客があるのは、レハンのプロモーションが優れていたからだと思っています。YouTubeで、「銀山町生野」と検索していただきましたら、上位に出できますけれども、この動画はイクノステイのオープン時期に合わせて制作しており、見ていただくと非常にクオリティの高い動画となっていると思います。3分程度ですので、また見ていただけたらと思います。

レハンは大学で工業デザインを学んでいたのですが、写真撮影にも優れておりますし、ドローンでの撮影もしますし、3Dプリンターも使うことができます、すぐれたクリエイターです。

このレハンのこれまでの活動や取り組みを見ておられますと、人が人を呼び寄せてくるという印象を実感しています。いくの地域のように人口が減少していきますと、すべてのものをおしなべて持ち上げるというよりも何か突出するもの、少し成果の見えるものを引き上げていくことに集中することが、結果的には地域全体に波及効果が広がっていくのではないかと思います。明治期に日本の近代化のために、お雇い外国人としてフランス人のコワニエがやっていますが、

その155年後の今日、レハンが、生野再生のための令和のお雇い外国人になるのではないかなと期待しているところで

す。
今後のイクノステイの課題ですけれども、宿泊だけではなく、地域の体験とセットにした取り組みを展開していきたいと考えています。

2025年の大阪・関西万博を見据えて兵庫県では、兵庫のフィールドパビリオンに取り組んでいますけれども、イクノステイも地域の歴史遺産、文化、自然、食材等を体験していただけるようなプログラムを作り、持続可能な地域づくりのためにも稼ぐ仕組みづくりが構築できればなと模索しているところで

です。
以上私からの発表とさせていただきます。ありがとうございました。

図司／ありがとうございました。自治協議会のいわゆる地域運営組織の取り組みの中で事務局長としてご活躍、そのお立場で集落支援員の肩書きも負いながらということだと思います。詳しいところはまた、ディスカッションのところでお伺いしたいと思います。

最後になりますけれども高知県室戸市からお越しいただきました川島さんから、ご報告をお願いします。

川島／高知県の室戸市からやって参りました川島です。本日はよろしくお願いたします。

私は高知県室戸市に2014年から家族で移住してきました。夫は漁師をしております。2017年から椎名集落活動センターたのしいなの集落支援員として着任をしております。移住当時は保育園と小学生だった子供たちも現在は大学生と中学生に育っております。

私の暮らす椎名地区の概要についてです。まず、高知県というのが四国4県のうち真下部分に当たるんですが、その中でも室戸市は、四国の右下高知の右下にあたる部分に存在しております。大阪からですと大体車で六、七時間ぐらい、高知空港も2時間近くかかりまして、辺境の地です。電車も通っておりません。室戸市の人口が1万2000人弱なんですけれども、その中でも、椎名集落はとても小さな集落で、人口330人、世帯数は160世帯で、ほとんどが高齢のご夫婦もしくは単身という形で、高齢化率も60%を超えているような状況です。場所といたしましては、室戸市の東海岸沿いに細長く伸びる集落で、海の次はもう山が迫っているような、平野が少なく海と山がせめぎ合っているようなところに暮らしております。

そこに椎名小学校という閉校した小学校があるんですけど、そこを拠点に集落活動センターという県の中山間地域対策

の取り組みのセンターが設立することが決まりました。さらにお隣にはむろと廃校水族館という、全国的にも有名になった水族館ができて、まず同じ小学校の校舎を併設という形で一緒にシェアして使っているような状況です。「たのしいな」と言わせていただくんですけど、「たのしいな」の運営母体は椎名集落活動センターたのしいな運営委員会という地域の団体になります。

水族館は、2018年にオープンし、今年に入って60万人を突破するぐらい。人口1万2000人の町に人がすごい押し寄せるような状況になりまして、本当に有名な場所になっています。

そういう中で、地区の基幹産業なんですけれども、椎名大敷組合という定置網漁業の大型定置網の組合があります。雇用型漁師でサラリーマン漁師というネーミングとして、全国に発信しまして、水族館の人気とともに結構メディアの取材を受けることがあります。従業員30名なんですけれども、私の夫が入った時は、本当に県外から直接の雇用っていうのは、私の夫以外にはほぼいない状況だったのが、今ではもう半分ぐらいが、県外とか、室戸市の他の地区からいらしているような方になっているような状況です。富山県もブリが有名だと思うんですけど、春先になったらブリが回遊してきて、港中がブリで沸くような状況が見られます。

さらに秋祭りも、すごく規模の大きな素敵なものが行われていまして、私が引越してきたのがちょうど9月の末で秋祭りの準備が始まる頃でした。何も知らずにきて、このお祭りを見たときに本当に感動したんですね。小さな子供たちから大人までが集まって踊りの練習をしたり、若者がたくさん帰ってきたりしながら神輿を担いだりしているのを見せていただいて、すごいなっていうのを感じました。次の年からは夫も神輿を担いだり、子供たちも、舞姫とか稚児とかの役を頼まれたり立ち踊りも踊るようになったりというふうにしたんですけど、コロナ禍でしばらくは神事のみ状況が続く、今年こそ復活という話が春先までは出てたんですが、同じく8月9月の神社の長の方々の話し合いの中で、今年も神事のみというようなことになってしまって、本当に今ちょっと存続が心配されているところで

です。
その中で「たのしいな」の活動なんですけれども、話し合いを続けて6本の柱を基本にしてやっていこうということが決まりました。もともと椎名地区が高齢化も進んでいたり、小学校も閉校になったりという過程で、婦人会、老人会といった母体となるような活動団体が全くないような状況でした。残っているのがもう消防団活動や椎名の自主防災組織、あと大敷組合って会社があるような状況の中で、本当にここに書いてある6本の柱に沿った活動団体、椎の実げんきクラブも全部、ほぼ「たのしいな」が設立されてから活動が始まったよ

パネルディスカッション 「集落の暮らしを未来へつなぐ ～縮退する過疎集落に向き合う現場での取組と課題～」

うな団体になっております。

組織図なんですけれども、中心に「たのしいな」の運営委員会がございます。こちらは地域の有識者や長の方が、メンバーとして構成されておりまして、その傘下に実際の活動グループとして部会のような形で、様々な活動グループが存在しております。

室戸市のふるさと応援隊として、もう1人、地域おこしの協力隊の職員がいるんですけれども、私と2人で、その運営委員会とか活動グループのフォローであるとか、企画支援であるとか、あと行政との調整役というものを担っております。実際、建物のリノベーションが終わって、オープンするまで、私は半年前に着任して、拠点の施設がないような状態で市役所から通っているような状態だったんですけど、まず着手したのが、月1の集落通信の発行でした。その時は私自身暮らして、三、四年経っていたんですけども、他の場所に働きに行っていたり、週末は子供の用事でスポーツクラブの用事で出たりっていうので、全く地域のことわからない状況だったりして、A4の紙の片面を埋めるのが精一杯だったんですが、今ではA4、6ページぐらいですかね、本当に集落のローカルマガジンみたいなものになって、大敷組合長からの記事をいただいたり、むろと廃校水族館長からの記事をコラムとさせていただいたり、私自身協力隊員もコラムを書かせていただいたりして、これをもとに、いろんな活動を発信しているような状況です。

具体的な活動を見ていきたいんですけども、まずはたのしいな運営委員会が主催している活動として月1のピザづくり講習会と、夏場に行うピザ焼きの体験イベントがござい

ます。ピザ窯をまず作りたいね、ピザをやってみたいねと作ったはいいいんですが、じゃあ活用というところになったら、委員さんが尻込みしたり、義務感にとらわれてしまって、「これやらないかんが?」「行かないかんが?」みたいな言い方をされるようになったので、いやいや、そうじゃなくて、「皆さん来たい方は来てください。強制じゃないですよ」というのをまず言いました。もうやりたい方でまずやらないと、続かないかなというのを感じたので、そういうふうになんて言わせていただいて、来ていただいた方ではもうやりたい方が来ていただいて、メンバー自身が楽しく続けられる場っていうふうな形で続けております。

その中で、せっかく大敷があるんだから、魚を使ったトッピングしてみようとなり、朝、港に行って魚を仕入れるところから始めました。磯もんと呼ばれるアワビとか、サザエとはまた違った小さな貝を、磯に行って取ってきて、茹でて食べるような文化があるんですけど、そういった磯もんをトッピングに使っても、結構県外の方とか観光客面白がるんじゃないかと

いうので、大潮の日をねらってみんなで磯に行って、磯もんを獲るところから始め、ちょっと楽しいと思う場を一生懸命作っています。それを観光客とか他に広げるような活動をしています。

たのしいな運営委員会は地域文化祭も行っていきます。これも他の地域では、地域文化祭ってやられているのを見てきたんですけども、椎名にはありませんでした。ただ住民の方とお話していると、習字の先生をされていた方とか、押し花を教えられている方とか、「名人」はいっぱいいるなと感じて、その作品をみんなで広めよう、みんなに見てもらって、お互い褒め合う、愛であうような文化を作りたいなということで始めました。今年5回目になるんですけども、集落の人口が減ったり、作っていた方が入院されたり、本当残念なことに亡くられたりということも起こったりという中で、作品を出してくれる方が年々減っていきつつある状況でもありません。その中でも、水族館の来年のカレンダーの原画を一番に公開される場としたり、今年は地域にゆかりのある方、例えば兄弟ですとか息子さん娘さんが地区以外に住んでいたとしても、そういった方の作った作品も出してみる、他の地域の集落活動センターさんにも出展を呼びかけて来てもらう、ということで盛り上げていこうとしているところです。

地域カフェとしては、椎の実さんというグループの「ちいさな海のカフェ」が最初に始まった活動になります。母体となる施設や団体がない中で、何をやろう、まずみんな集まる場を作ろうや、お茶飲み場やたらつくれるかもしれないということで、メンバーが集まって作られました。ただメンバーの中には、お菓子づくりとかをしたこともない人がいたんですね。お菓子なんか作ったことないし、他の人やってや、と違う仕事ばかりする方もいたんですけども、メンバーが入れ替わったり、やっていく中で、私も作ってみようかなという感じも出てきました。70オーバーの方なのでバリバリに社会人として働いていた時代もあったりするけど、家事とかお料理とか全然してこなかったような人が、自分で1からレシピを調べて作り始めました。家にオープンを買って試作したものを持ってきて、それがすごくおいしいから次のカフェの時はメニューにして出そうよみたいな話になったら、もう本当に生き生きしてきたんですね。人任せにしていた分を自分が担うようになって、何か責任をつけてあげたり、自分で何かするという行動を起こす手助けをするのがすごく大事です。70歳過ぎても80歳過ぎても人はどんどん成長できるし、するんだなっていうのは、見ててすごくいいなと思っています。

このカフェをやるたのしいなの場所は地区の中心にあります。移動手段が無くて一人暮らしされている方も多く、細長い集落なので、端と端のお友達同士のおばあちゃんも減多に会うことができなくなって電話でお話したりしているんで

すけれども、その方たちも月に1回であれば、何とか移動手段を考えてきてくれたり、頑張っ歩いてきてくれます。ここに来れば約束をしなくても出会えるということが大事で、2時間しかカフェの時間がないし、月に1回しかやらないんですけど、出会える確率も高いです。密度の濃い場となって、1時間2時間でワッと人が30人ほど集まり、元気にしとつかとか、顔見んかったけど元気かねみたいな、ちょっと安否確認の場であったり、そういった機能も持っております。

げんきクラブは、県下で行っている100歳体操という事業があって、グループが、センターができる際に、この地区でもやろうということで始めました。体操のほかに、手芸など何かをすること、市から補助が得られるような仕組みです。

初めは勢い良くマシンを買って欲しい、私達手芸すると言って頑張っていたんですけど、時間が経つ間にメンバーも更新されないまま、どんどん老いていくような状況になっています。入院されたりしてメンバーが減ってしまったり、だんだん目が見えなくなって、手縫いができないよとか、細かい仕事ができないというので、意欲が低下してくる部分があって、私たちがどんな活動なら喜びながら、やりがいも得ながら、充実したものにできるか模索中なところではあります。

次に「たのしいなこどもクラブ」ですが、この団体は、私が企画して立ち上げを行いました。私自身が会長になっております。私は子供を3人連れて引っ越してきましたが、室戸の中でも僻地になるので子供たちはスクールバスで通っております。そうなってくると、放課後がない生活なんですね。放課後に友達の家遊びに行くとか、友達とその日急に約束して遊ぶってことがもうほぼ不可能になります。他の子なんかも聞いていてもやっぱり遊べなくて、家で籠っていたり、土日も、お母さんの手を借りないと友達の家にも行けないような状況です。その中で、椎名なんかつまらんし、室戸なんかおってもしゃあないし、早う出ていきたいとか、こんな何もお店もないとこ居るの嫌や、みたいな文句がどんどん出てくるんですね。こんな不満ばかりのまま、子供たちが巣立っていったら、もう室戸のことも椎名のことも嫌いなまま終わってしまう。そんな悲しいことはないなと思ったので、ふるさとへの愛着を育てられる場所が作れたらいいなと思って作りました。子供たちが集まって、何する?、自分たちで決めてみて、何してもいいよ、できることなら支援する、という形で始めました。ご飯づくりを試みたり、浜で遊んでみたり、ちょっと基地づくりを試みたり、何かするにはお金が要るよね、じゃあそのお金どうしたらいいかな、みんなで稼ごうよと提案して、水族館もあるし、夏休みだったら人もたくさん来るというので、こどもカフェであるとかこどもマルシェという企画をしたりしてきました。コロナ禍で、お母さんたちの意識がいろいろ

あって気軽に集まれない状態が続いていましたが、ちょうど去年ぐらいからちょっとずつ集まるようになりました。お楽しみ会から始めたり、新入生の歓迎会から始めたり、違う活動グループの販売活動に有志でいいから親子で参加してもらえませんかとか繋がりだけは保つようになら、お母さん同士でのグループLINEも作っています。OBも販売活動などには手伝いに来てくれるような状況になっております。

椎名大敷組合主催の「お魚まつり」はコロナ前に3回ほどしてありました。漁師さん自身が出店、お料理をして、料理を振る舞う、魚を売るというようなイベントを行いました。大敷組合では、朝、白いご飯だけ持っていったら、朝獲れの魚とあら汁を、みんなで同じ釜の飯を食う文化が残っておりまして、コロナ中何度か中断はあったんですけど、今もう復活しております。その時に出る賄い汁の漁師汁がすごくおいしいと聞いていて、じゃあ、それを売ってみませんかという提案を最初にしました。漁師さんからすると毎日食べていて、もう食べ飽きている部分もあるし、こんな余りもの入れた汁売っていいんか、値段をつけて売るもんやない、といろいろ言われたんですけど、絶対売れますからぜひやりませんかとか提案をさせていただきました。ただ、やるのは皆さんなので、やるやらないは皆さんで決めてくださいと話し合いをして実現をしたのが第1回目です。それ以降は漁師の刺身定食だったり、ブリの盛り放題定食であったりというのを企画しました。今年も春に復活させようかって話が出たんですけど、準備が間に合わなかったり、あとブリ自体がちょっと、今年室戸では不漁になってしまった関係で、残念ながらできませんでした。ブリのブランディングも今室戸市では始まっているので、それと合わせて来年こそは開催したいなという話をしていきます。

「しいな遊海(ゆかい)くらぶ」という団体についても、企画と立ち上げを私が行いました。ただ、代表は地域の元椎名大敷組合の長である方とか、漁協の支所長であった方とか地域の名士の方になっていただき、文化の発信、体験プログラムを作って、港のまち歩きであるとか、ビン玉編みであるとか、椎名や室戸の魅力発信を行っています。最近、体験プログラムを作って販売できるようなシステムを作ったおかげで、すごく物事を作りやすくなりました。新しく地域おこしの協力隊の観光担当であるとか、海洋深層水のPRの隊員が来た時に、何していいかわからず、ちょっと戸惑っているときがあって、そういうときに、この場を使って何か企画ができるんやったら使ってくれていいよと言っています。現隊員、OBの隊員の子も、今もスタッフとして参加してくれているんですけど、そういった地域おこし協力隊の自己実現とか、居場所づくりの場としても少し機能しているような状況です。

大敷の魚を本当にみんなに知ってもらいたい。若い人を中

パネルディスカッション 「集落の暮らしを未来へつなぐ ～縮退する過疎集落に向き合う現場での取組と課題～」

心に、室戸の港町に住んでいても魚を捌けないお母さんも多くて、魚、面倒くさいし食べんわ、という方もいたり、逆に豊富だから見向きもしない部分もあります。そういう魚離れを防ぐために、ご当地ドック、ご当地食を作りました。大敷の漁というのは、定置網でも朝になってから漁に行けるかどうかにも決まるような状態で、朝潮の流れが悪いし今日はいかんとか、昨日まで獲れていたブリが今日になったらもう全然獲れないとか、もう日によって獲れる魚も様々で、獲れるかどうかにもわからないんですね。

その中でどんなふうに魚にフォーカスしてブランディングするのか、すごく難しいのですが、そうじゃなくて、そういった獲れないとか、時期や季節によって変わるってこと自体をPRしたらいいんじゃないかと考えました。季節ごとにお魚の内容も変わって、それに柑橘を合わせたらすごくさっぱり美味しくいただける。地元に移住してきた方に、室戸の野菜を使った専用のピクルスを作ってもらって、地元のパン屋さんのパンを使って、すべて室戸産で販売をさせていただいています。去年から本格的に季節ごとのイベント販売を行い始めたら、いろんなイベントからお問い合わせが来ています。私たちには体験も食品も両方ありますが、イベントに合わせて食品だけで出展してみたり、体験だけを持っていたり、両方持っていたり、臨機応変に動いているような状況です。

今後もしていきたいのが、すでにある海の資源を使って、見せ方を変えて発信していくことです。そこには地元の方がスタッフとなって関わっていただいたり、親子が関わっていただき、巻き込みながら活動を続けているような状況です。発表は以上です。

図司／はい、ありがとうございました。集落活動センター、地域運営組織の高知県版になりますけれども、その中で活躍されているということで、多様な活動をご紹介いただきましてありがとうございました。この後ディスカッションに入っていきたいと思います。

お聞きいただいたように集落対策の切り口も多様ですし、そこにおける支援員としてのお立場での対応だということも見えてきたかと思いますが、改めて少し皆さんとお話伺いながら整理したいと思います。

まず岩国の話ですね、小玉部長にご紹介いただきましたけれども、集落支援員さんの役割っていうんでしょうか。どういうところで、どういうねらいで活躍して欲しいというふうにお考えかと改めて少し整理してお話いただけますか。

小玉／集落支援員さんの活躍の場、役割なんですけども。実態的には、地域おこし協力隊員さんと非常に重複する部分があります。その一方で集落におきましてはもう限界集落に

近い集落、小規模高齢化集落におきましては、社会保障における、地域包括的な役割であったり、福祉委員さんの役割であったり、ちょっと広く地域の特性によって変わってくるのかなと、思っております。社会保障的な部分に関しましては、やはりそれを担うのは社会保障の部局であり、地域包括でありその役割を深化していくべきだろうと思っています。私の方としては地域づくりになって参りますので、その地域の思い、それから夢、そういったものを集落点検の中で引き出して、形作ってくれるのが集落支援員の役割かなと思っています。ただし、孤立しないように、集落支援員さんが浮かぬようにという支援は大事だと思っています。

図司／はい、ありがとうございます。そう意味では先ほど事例の中でもご紹介いただきましたけれども、その地域の皆さんに声をかけたり、お話を聞いたりとかアンケートをとりながら、それをビジョンにまとめていく山口県さんの夢プランってというのは、県の事業ですよ。そこに繋いでいくというお話が、ある意味骨格としてあって、先ほど伝統芸能の話もありましたが、地域の方もそういう動きも一緒に絡んでいるんですか？そこはまたそういうプランづくりとはちょっと別の地域の中での動きになるんですかね。

小玉／伝統行事の方で少し深めたかったのは、新任されたばかりの集落支援員さんで、今大きな壁にぶつかっていますよって話なんです。ですが、地域の方からは、このまままだとこの伝統芸能を続けていくことが難しいって状況にきていますので、その新しい若い集落支援員さんなんですけども、その知恵を出して、文化財と調整をしつつ、どう残していくかっていうことを今苦労しながら進めておられるところです。まだ私の段階では傍観をしている状況ですが、楽しみに待っているところです。

図司／ある意味その地域の一番大事なところを一緒にあって、まずは関わりながら信頼関係を作っていくっていうか、そういうところも含めてということなんでしょうか。

小玉／そうですね。地域行事に関しましては、地域の宝で残さないといけないという観念がですね、少しこのコロナで変わってきたかなと思っています。4年間3年間、地域行事が止まっていたから、復活する段階でまたやるのという声結構出てきていました。そういったことも含めて、集落支援員さんの役割としては、これを存続していくことの大切さ、これが地域の誇りになるんだよってということと一緒に考えながら進めていけるといいなと考えております。

図司／はいわかりました、ありがとうございます。続いて小島さんですね。地域の自治協があってそこに事務局長という形もありますけど、これは本当は行政の方がいらっしやれば、その方に聞いたほうがいいかもしれないんですが、各自治協の事務局長として集落支援の仕組みをうまく絡められている感じですかね、それとも生野の場合がそういうふうに、特出してそういう扱いになっているか、その辺をおわかりになりますか。

小島／朝来市の場合は、集落支援員として、一般の方を募集せずに、自治協の事務局長を任命しています。また、市の職員の中で地域に関わる地域担当職員がいて、各自治協を支援する立場でいてくれています。ですから集落支援員というのは、朝来市の場合は各自治協の事務局長という位置付けです。

図司／ある意味、事務局長の皆さんの人件費のところを、集落支援員の制度を使ってみている、そういう解釈でよろしいでしょうかね。なるほど。ありがとうございます。川島さんのところは、室戸で「たのしいな」の中で活動されていますけれども、他にも集落支援員さんっていらっしやったりするんですか。

川島／現在集落支援員が私含めて4名おります。そのうちの二名は他の集落活動センターの担当の支援員になります。もう1人が集落活動センターにまでなるかどうかかわからないけど、地域として声が上がっている小さな拠点づくりの事業として採用された方が1人おります。

図司／なるほど。ということは、ある意味、集落活動センター、地域運営組織みたいなところを作っていくところに、支援員さんにサポートに入ってもらってるとそういう理解になります？

川島／そうですね。

図司／なるほど。はい、ありがとうございます。これ以外のケースも実はあるんですけども、去年、過疎連盟の方で、報告研究会で報告書を出していますので、またそちらもご覧いただければと思います。田口先生、今の話どうですかね。集落支援員、いろんなところに活用されていますけど。

田口／今日ご報告いただいたものは全然違う活動ですけど、この違う活動ということがすごく大事だと思っています。やっぱり地域の状況は地域によって全部違うので、この地域に

とってどうしてこ入れが一番有効であるかという時に、室戸でいうと、やっぱりそういった元気づくり、「たのしいな」ってすごい良い名前だと思いますし、朝来だとその地域の基幹的な自治組織をきちんと運営するようなことをやられています。朝来がこれだからうちでもこれやるというのではなくて、今日お越しになっている皆さんもそれぞれの地域の状況が全部別々にあって、その中にどうしてこ入れの仕方が一番有効であるかっていうことを、行政としてきちんと状況判断をして、そこに入れている。だから、結果、やる活動がバラバラになっていくということは、ある意味すごくリアリティーのある話だなと感じました。

図司／ありがとうございます。私も岩国にお伺いしているりと部長はじめ、皆さんに伺ったんですが、印象的だったのは、市として中山間の条例とか、計画作られていますよね。他ではなかなか無い気がするんですけども、どうですか、やっぱりこう一つ幹みたいなものがあると活動がしやすいのですか。

小玉／表面的にはこれが根幹になってですね、計画策定をし、それで進捗状況は図れるわけですから、これはすごく有用だと思います。本音の部分で言うんですけど、これ定期的に議会報告があったり、報告書を作らないといけないんで、ちょっと時間も取られてもったいないかなというところですが、新たにスタートする上ではやっぱりこの計画・条例ってというのは、必要性は高いんじゃないかなと思います。

図司／その辺も、参考にさせていただければいいかなと思います。ありがとうございます。さっき田口先生に言っていたようにいろんな地域に合わせた集落対策とか支援員の皆さんに入っていただくとなると、そこにどういう方が適しているのか。まず小玉部長、岩国の場合は、地域内外問わないけれども結果的に外の集落というか地区外の方が入っている話でしたけれども、その辺はどうですかね。

小玉／一般公募していますので、その地域、対象になる支援をする集落の方が応募されても構わないですけども、その集落の方から選考しようっていうのは避けたほうがいいかなと思います。というのが、その集落支援がうまくいってる時にはですね、いいんでしょうけども、うまくいかなかったり、トラブルが起きたりすると、その集落におられる方だと逃げ場がなくなっちゃいますから、そういった観点からも広く募集、考えています。それから、集落到何らかの行き詰まりがあるからこの支援が入るわけなんで、その視点を持って人っていうのは、内部よりも外部からの方がいいかなと思っておりま

パネルディスカッション 「集落の暮らしを未来へつなぐ ～縮退する過疎集落に向き合う現場での取組と課題～」

す。そういった意味でも、地域おこし協力隊と同様に、うちはこの集落支援員制度は、外部人材の活用という位置付けでもって推進をしております。

図司／ある意味当初は地域に精通する方っていうと、むしろ地域の中の皆さんが担う想定で支援員の仕組みが立ち上がってききましたが、そうじゃない切り口もありうるということでしょうかね。

小玉／はい。決してその地域の方を阻害したり、おいてというわけじゃないんですね。その集落の方が応募されてもいいんですけども、やっぱり面談をする時、考え方を聞くときに、やっぱりその人物像でもって採用したいなと考えております。

図司／ちなみに、岩国は、複数の人数を置かれていると思うんですが、性別や年齢層について、何となく雰囲気構いませんので、ご紹介いただくと皆さん、いろんな方がいるイメージがしやすいかなと思います。

小玉／地域づくり相談員を入れて9名おるんですけども、このうち、70代が1名、60代が3名、あとは30代、40代ですね。男性がお一人で60代の方、後はすべて女性です。

図司／私も現場で女性の皆さんや40代の方からお話を伺ったんですが、世代とか、それぞれ適材適所で配置する形になりますか？

小玉／はい。良い人材が今残ってくれているなと思います。うまくいかなかった地域に関しては去っちゃってるんで、今残っておられる9名に関しましては、非常に個性的な方、特に若い方が、別の集落から支援する集落へ移って、支援をしているわけですけど、自分のとこではこうだよっていうのを活かしながら、コミュニケーション取りながらいけるんで、外部の成功事例とかに関しても、スッと入って話をできる、引き出せる。そういった意味でいいかなと思います。だからやっぱり人物像でもって選ぶべきかなと思っています。

図司／はい、ありがとうございます。続いて小島さんですけども、小島さんご自身のご紹介があんまり先ほど時間を取っていただかなかったので、どういう人なんだらうと皆さん思われていると思うんですが、事務局長になられる、その経緯みたいなのところを可能な範囲でちょっとお話いただければと思うんですが、いかがでしょうか。

小島／私は元市役所の職員で、地域自治協議会の立ち上げ時期も関わってまして、退職してから、生野の自治協からお声がかかりました。立ち上げに関わっていますので、逃げることはできませんし、やらなきゃあない、ということでやっているということです。

図司／はい。ありがとうございます。他の自治協の事務局長の皆さんっていうのは、必ずしも市役所とか行政OBじゃない方もいらっしゃると思いますか。何となく雰囲気構いませんが。

小島／7割ぐらいは、市役所のOBです。やはり自治協は市役所と連携することが結構ありますので、そういう面では市役所の職員の方がしやすいと思っています。

図司／そういう意味でやっぱり適材適所なんですね。先ほど地域精通者というか役場のOBの方がちゃんとこういう形で入っていくと、先ほどの役所とのやりとりも進めやすくなると思うんですが、具体的に事務局そのものがもう裏方ですよ。その事務局長としての小島さんの役割とか、この辺が結構、肝で動いているみたいなのところってありますか。その場その場という感じですかね。

小島／情報共有は大切にしたいなと思っています。お前がやっとなやないかい、みたいなことにならないように、役員会や運営委員会では共通認識をした上で進めていくことを意識しています。今回のゲストハウスにしても、ある面、リスクもありますので、情報共有し、共通認識に気をつけながらやってきたつもりです。

図司／いろんな取り組みを皆さんやっているけど、みんなで作っているよっていうことを、機会を見つながら共有していくところに、ある意味腐心されているんですね。ありがとうございます。

次に、川島さんとしては、そもそもどういう経緯で支援員になったかみたいなのところをお話いただくといいかなと思うんですが。

川島／室戸に来た当初は、子供の引っ越しについての精神的なケアとか、送り迎えがあったので、しばらくお仕事お休みし、何もしてない状態で半年ぐらいいたんですけど、もうそろそろパートでも始めようかなぐらいい時に、ちょうど観光協会のパートの募集を見つけて、室戸世界ジオパークセンターという廃校になった中学校をリノベーションした施設で、受け付け業務を始めました。観光にも少し関わって、結構いろんなお電話がかかってくるんですね。連休前だったらこの宿

がいいですか、どこがありますか、室戸ってダルマタ日とかダルマ朝日が見られるんですけど、それはいつ、どこで見られますかとか、お祭りの問い合わせとか、いろんな問い合わせがある中で、やっぱり室戸市全体のことをいろいろ覚えて仕事としてやっていくにはちょっと広くなって感じてしまったんですね。観光の仕事はすごい楽しくて、人とお話しするのも楽しくて、自分が感じている室戸のよさをお話しするのも楽しかったんですけど、ちょっと手に負えないみたいな気持ちにもなるところで、ちょうどこの集落活動センターができる、廃校水族館ができるよというお話が自分の住んでいる地区に出てきました。私の中で降って湧いた気分だったんですけど。実は小学校の利活用の公募というのはずっとされていて、10年ぐらいされている中で誰も公募、企業もしないような状態でしたが、日本ウミガメ協議会という、その今の水族館を運営している組織が、研究員を10年以上、椎名に在住させて活動してきた恩返しみたいな形で資料館みたいなもの造れないかというような申請を始めたのがきっかけに、室戸市側としても水族館の構想が出てきて、一気に加速度的に始まった計画でした。自分が住んでいるところに水族館が出来るのはすごいし、しかもそういう拠点施設ができて何かにぎわいが出る、何かわくわくするな、みたいな気持ちがあって、最初の話し合いの会から参加させていただいたんですけど。地域として、観光施設が急にできることに関しては賛否両論があったり、造ったところで維持管理費どうすんだとか、そんなお客来るのか、室戸だぞ、みたいな話もたくさん出てきていました。オープンしてみればすごい、全国的にバズってしまって、Twitter（現：X）とかでも拡散されてどんどん人が来る状況が生まれています。私は単純に、面白いことができればそんな面白いことないし、子供がいたので、まず住んでいるところを面白くしたいとか楽しく生きられたらいいなというのが、最初でしたね。

図司／ありがとうございます。ここもやはり先ほどのように、いろんな狙いに合わせて、どういう支援員さんに入ってもらうか、どんな方がいいのかがまた連動してくると思うんです。田口先生どうですかね。地域の中のパターンもあるし、外のパターンもあると思うんですが、その辺どうぞ覧ります。

田口／すごくわかりやすく。先ほど川島さんは、移住者であるってことも大きいなという気がするんです。地域の皆さんが、なかなか地域のことを前向きに評価しづらくなってきており、特に中堅の皆さんが、自分たちの存在とか価値を当たり前のものとして思っている時に、移住者は、その地域を前向きに選んだ人たちであり、全く違う地域の見え方ができることにあります。まかない汁が上手いのが地元の人た

ちはわかってないというのと多分同じだと思うんですけど、外の目線で伝えていくことはすごく重要です。同時に、そこからやっていくときに、先ほどの小玉さんの話にもあったとおり、地域で実務を動かしていくときは、行政の皆さんが持っている事務処理能力、事務局能力が効いてきます。システムがある程度あってそれを運営していくことに関して、行政職員の力は結構大きいですが、何か新しいものを0から1に変えていくには、突破力みたいなことは必要ですよ。その時に移住者の力が重要です。私も移住して、何でわざわざこんなところで住んでいるのとはすごく言われるんですが、僕は何でわざわざこんなところに進む価値があるかっていうことを100倍返しぐらいに言わないと、なかなか理解してもらえないです。だんだん暮らしていると伝わってくるころがあって、そういう時に外から来た人たちの存在は地域にとっては良くて、だからうまく機能しているんだらうなという気はすごくしました。

図司／そうですね。岩国もやっぱり外の地域、移住みたいなことではなくても、同じ市内でちょっと離れたところの地域の人たちが、関わっていく役割も持てるという話もいただけたんじゃないかなと思います。ありがとうございます。

ここまで導入というか、入口の話をしてきましたけれども、次に、皆さん方のお話にあったように、支援員さんと地域の関係、支援員さんと行政の関係というところが、いろいろ効いてくると思うんですよ。皆さんとの打ち合わせでお話を聞いているときも、手応えもあれば、苦勞された話があったりするので、その辺のお話をぜひ共有できればと思います。まず地域の皆さんとのやりとり、支援員と地域の皆さんの動きの中で、良い動きもご紹介いただいていますけれども、ご苦勞されていたりとか、こういう場面で大変だったみたいなお話を聞いてみたほうがいいかなという気がしています。まず小玉部長、岩国ではいろんな地域で支援員さんが動かれていますけど、地域とのやりとりの中で支援員の皆さんが苦勞された話もいろいろ耳に届いていると思うんですが、そこにどうやってカバーされたか、みたいなところも含めてお話しいただけますか。

小玉／失敗例から言うんですけど、集落支援員を導入し、地域に入っていくときに、私、大切なこととして事前の地ならしは行政の役割だよ、これは必須だよというお話をしたんですが、これが中途半端にしかできてなかった事案があります。集落点検にいきなりその人、頑張って行ったんですけども、行った方々に何本かうちに電話が入ってきて、不審な人が来たよ。あれはどういう人なんだよ、うちはそんなのいらないうと。それから個人情報も聞かれたことにすごく憤られ

パネルディスカッション 「集落の暮らしを未来へつなぐ ～縮退する過疎集落に向き合う現場での取組と課題～」

て、その人の役割がわかってなかった、周知できてなかったから、もう早速、しょっぱなで、くじけちゃったなというのがあります。集落の代表の方には話は通っていたようなんですけども、末端の人までこういった人が訪ねてくるよとか、こういう役割で来ていただけるんだよっていうことが、うまく伝わってなかったっていうのがあります。その他、集落との問題というよりも行政担当者との軋轢の中で、残念ながら去っていく方っていうのがあります。

かなり熱意を持って、集落支援員さんでも入ってこられてこういうミッションやりたい、こういうものをやりたいと、いろんな発想できる方がおられるんです。岩国の場合、若い方が集落支援員さんに多いので、いろんな発想とか夢を持って集落に当てはめて、集落の人と一緒に話をして、これできるといいねという話でプランニングもすごい上手なんですけども、それを実現できる行政の仕組みがネックになって進まなかったり、点検とそれからアンケートと話し合い活動のもう無限ループに陥っているところもあります。この3者、集落支援員と行政と集落の役割が上手く機能してコミットしてないと難しいなと思っております。

関司／できれば事前に目線合わせをしっかりとやるとか、地域の皆さんにも、その地域の皆さんに支援員さんが行きますというのは、事前に配って周知しているとか結構アナログな話ですか。

小玉／そういったところもあります。配りものでやっているところもあります。集落の会合があるのでそういった場で情報提供させていただいたりもしています。

関司／ありがとうございます。小島さんのところは支援員の立場としてというよりも、別格になるかもしれませんが、派生して、地域運営組織の話もおそらく集落対策として集落連携の要素が大きいですね。実際に、自治協の動きをされていて、ご苦労されているような、或いは事務局長の立場でご苦労されているような話あれば、少し話題を出していただければと思いますがどうでしょう。

小島／地域自治協議会は任意団体の住民自治組織です。通常の企業の組織のような雇用契約で結ばれたものではありませんし、私もアルバイトです。あくまでも社会関係資本という人間関係的なところで繋がりを維持している、それが規範にもなっているわけです。そして、運営委員会を構成している各自治会の区長も、どうしても毎年入れ替わりもありますので、そんな中で規範を維持しつつ、みんなで作っていただかなければなりません。お前が言うならしゃあないな、と

というようなことが大事になってくる部分もあります。雇用関係ではないところをどう繋いでいくか。人間関係調整学芸員というのがあったら良いのではと、私は前から思っているんですが。

関司／ありがとうございます。確かに役員さんも変わったり、人が変わる中で、ある程度、組織、チームとしての一定のポジションをキープしていくのは、それなりの馬力は要るなと思います。かといって、マニュアルでいくような話でもないと思うので、そこを丁寧に行ってくださるでしょうか。

川島さんはいかがですか。地域の関係、地元ということもありますけど、或いはそれこそ行政の皆さんとの関係、ご苦労話はありそうですが。

川島／私は立ち上げの会から事前の会から関わっていたんですけど、その時から担当課の課長さん今までで4回変わっているんですね。補佐とか班長もどんどん異動している。なので、人を頼りにしないというか、そこに依存をしない意識でおります。課長が変わるとちょっとずつ方向性とか、やっていいことのクッション、ニュアンスが変わってきちゃうので、この人にはこういうことをきちんと報告しなきゃならないんだなとかいうことになってきます。言わなくてもどんどん自分のやりたいことやっても、やらしてくれる課長さんいれば、やっぱり報告してないとちょっとムッとされたりする場合もあるので、まず報告はめっちゃくちゃ大事にしています。ただでさえ違うところに施設があって、職員さんから見えない状況があるので、悪く言えばサボろうと思えば、なんぼでもサボろうと思えばできてしまいますが。まず、今週の予定から、どういふ人とおしゃべりして、でもその中でこういう課題が出てきたとか、こういう悩みが出てきた、ということも話します。ただ、それに対して何かしてくれてというのはあまりなくて、本当に報告ですね。自分のやることをきちんと伝えておく。

私、11月に着任してその次の月の12月からもう集落通信を始めたんですね、施設がないところからスタートしました。これは他のセンターとか他の取り組みの視察に行った時に、やってらっしゃる集落支援員の方がいて、これはいいなと思って、絶対やりたいと思ってやり始めました。それをどうやって配ろうかという話のときに、そもそも自治会通信というのを作っている自治会長と「たのしいな」の運営委員長が、実は同じで、そこが最初の部分はすごく良かったです。自治会通信を回覧する時にこれも一緒に回覧してください、とお願いをして、26班ぐらいに分かれているんですけど、その班で回覧し始めました。次の運営委員会の時にある方が、この通信すごい良いんやけど、何かその回覧やと回って行って、自分のとこに留めて情報を置いておくことができないから、全

戸に配れんかねみたいなことを言ってくださったんですよ。「よし」とか思って、室戸市の広報と一緒にその次の月番さんが配布をする形に変えて全戸にお配りできるようになりました。活動に関しても集落のいろんな行事、他の行事、「たのしいな」を使っていないような行事であるとか、出来事についても拾っていくようにしたり、水族館長には、何かこう住民にお伝えしたいようなことがあれば書いてみませんか？という形でコラムをお願いしたり、組合長からもこれから魚をブランディングしたり、椎名大敷が残っていく上で、大敷のことを知らない家族の方とかもいっぱいいらっしゃるような状況になってきていたので、その紹介も兼ねてやってみませんか？って話をしたりっていうので、どんどん広げて、みんなに使ってもらえるような通信に仕上げていきました。これがあるおかげで、割と信用度とか私に対する認知度も上がりまして、最初こそ、自治会の通信の方にこういう人が着任したからこれからよろしく願います、みたいな文章書いていただいたり、自治会の総会とかでもごあいさつさせていただいたりしたんですけど。今では初めて会うような集落の方でも、通信書いている川島さんねみたいな形で、覚えてもらっていたり、書いている内容も読んでいただいたりしている状況です。

図司／はい、ありがとうございます。地域との関係、行政との関係ですね。様々これもありますけども田口先生どうですか。

田口／いや皆さん強いなと正直思っていますね、やっぱり我々も人間ですから当然人によって違う。これは行政の皆さんも、人が変われば、少し雰囲気が変わるんで、どうしても一喜一憂してしまうんですけども。川島さんがしたたかに対応されているっていうのが、なかなかのすごい良い話だなと思うことと、その通信ですよ。これも結構僕、いろんな地域おこし協力隊員の皆さんには、絶対通信出したほうがいいって言うんですが、通信出すっていうのはすごく簡単なようで、継続するのはものすごく大変なことだと思います。それが、A4判で6ページって、もうどうということよ、って話です。これは地域の皆さんにとってはすごく大きな情報伝達手段であり、自分たちのやっていること、あるいは地域が、記事として蓄積されていることは、誇りづくりにすごい効いてくる気がするんですよ。そういうことをきちんと底上げという意味でいらっしゃるのは、すごく大きいですし、やっぱりこれ、なんでも行政だから安定運営ってあるんですけども、とはいえ、結構人事異動で起こっているのが現実で、それに対して、支援者や中間にいる皆さんがどう対応するかというスキルも、集落支援員の皆さん磨いていかなきゃいけない。もっと言うと、行政の皆さんにも、自分たちは結構波があるんだって

いうことを自覚していただいて、その波の変化率を小さくするようなことはぜひ意識しながら、現場の皆さんと対応していただけると。おそらく、みんながみんな川島さんみたいに対応上手じゃありませんので。そういうところを考えていただけるとありがたいと思います。

図司／はい。ありがとうございます。大分良い時間になってきましたが、もうワンサイクルやらせていただければと思います。それぞれの地域で支援員の仕組みが回ってきていますけれども、協力隊との違いで言うと、協力隊は制度として最大3年の任期を終えて、移住定住に持っていくかが一つの流れになります。

集落支援員に関しては、ある意味1年更新で再任OKなので、言ってしまうと、エンドレスにもなりうるようなところがあると思うんですが、ゴールを設定すべきものかどうか、導入の仕方によっても当然変わってくると思います。何もないと、ただだらしかねない悩ましさというか、危うさもちょっとあるなと私なりにには気にしています。それぞれ皆さんご活動されていて、この先、地域の様子も、さっきの「たのしいな」の話でも頑張ってるお母ちゃんたちとか、お父ちゃんたちも、どうしても数が減ってくる、ちょっと切実な話もありました。

こういう集落対策であったり、支援員の仕組みを、今後どの辺を見据えて展開されていくか。小島さんのところは自治協としての活動に置き換えていただいてもよろしいかと思えますけど。今後のところで、悩みもあるかと思えますので、その辺もこの場で共有しながら、この議論引き継いでいくっていう形になるかなと思います。小玉部長、いかがでしょう。

小玉／卒業はいつでしょうかというふうなお話でしょうか。

図司／卒業しないっていうのも。ある意味エンドレスだと思うので。



パネルディスカッション 「集落の暮らしを未来へつなぐ ～縮退する過疎集落に向き合う現場での取組と課題～」

小玉／エンドレスですね。その人のやる気が続く限り、意欲が続く限りは、ずっと続いていくのかなと思います。うちの場合はですね、今一番長い人でもまだ6年です。他の方はまだそこまで達していない方なんですけども。年齢的にもう限界がきて辞められる方、年配の方はそうですし、若い方についてはその意欲がある限りはずっと続けていくことができるかなと思っております。会計年度任用職員という立場ではあるんですけども、ずっと続けていく中で、また別の方策が出てくる可能性もあります。別の採用方法でもって、役所の違う部署にというような話にもなってくるかなと思います。役割としては、その集落が一つ落としかるまで行けば、集落は、うちは先ほど言いましたように150、実態的には200以上の集落がありますから、次々と担っていただきたいところがあります。

図司／支援員さんもある意味、いい関係で達成感というか、ここまでやったというのが見えて、もうちょっと次頑張ろうとかいうケースになると思うんですけども。今のところ、年配でもう体力的に厳しいって話は置いていても、比較的若い皆さんそういう意味では前向きなモチベーションでやっていただいて、出来る限り、続けて欲しいという感じでしょうかね。

小玉／はい。その人その人のミッションも地域ごとに異なるんですけども、集落支援員さん同士が集まれる場っていうのをすごく大事にしています。そこに地域おこし協力隊員も交える場面もあるんですけども、できるだけ雰囲気を見ながらその場では行政職員は逃げるようにしているんですね。そこで自由闊達な意見、行政の悪口、行政への不満、そういったものを自由に出していただいて、溜まっているストレスをバンと吐き出す場をうまくやれば、継続していけるのかなと、新しいものがその人たちの中でも見えてくるのかなと思っています。

図司／あと支援員さんが入られる地域の側のこともあると思うんですけども、どうでしょうかね。先ほどのプランづくりみたいなところで区切りにして、とりあえず支援員さんが次の地域に移ったりされるのか、ある意味関わっているところは、それなりにずっと伴走支援するのか、これも多分いろんなケースあると思うんですけども、地域側の方から見た時はどうでしょう。

小玉／基本的に伴走になってくると思います。関係性が自立できてくるかなと。うまくこれに進んでいけるかな、ということになれば、少し引いたところから見てればいいんですけども。手を引いてもいいよと言ってあげたいんですけども、

やっぱり強い繋がりが出来ちゃっているんで、気になって、やはりずっと関わっておられますね。最初に関わったところ、それから次に関わったところも、三つ目、四つ目の集落に行っても、やっぱり過去の関わったところの集落、イベントであるとかに呼ばれて、また気になってという形で関わりを上手く残されています。

図司／今の話だとメインの集落、担当集落は変わるけれども、縁ができたところは、続けてらっしゃると、そんな感じですかね。

小玉／と思っていますね。そうなると思います。必然的に。

図司／なるほど、わかりました。ありがとうございます。小島さんいかがでしょうか。

小島／私は地域自治協議会の事務局をしていますが、その構成組織である12の自治会のうちの区役員もしています。自治会というのは伝統行事を通して、いろんな繋がりが生まれますが、ここ3年はコロナ禍で事業が止まっていますし、伝統行事なんか中止したりしていますが、何もせずとも時間は過ぎていきます。令和5年の秋祭りで、コロナも明けてきたので、奉納相撲をどうするかとのことで、子供が少なくなったからもうやめようかみたいな話が出てきたんです。我が家は2歳と4歳の孫がいるんですが、相撲ができなくても泣き相撲でもええやんかということで、何年かぶりにやったんです。やればやったで、子供が少なくても結構面白いんですね。どうするかという時に、もうやめようってなるか、いやいや、やろうという話になるのか。その時の瞬間の判断が非常に大事やなって思います。このコロナ禍の後の第一歩というのは非常に、私は大事なかなと思います。ゲストハウスもなんとかやっている、それに伴う雇用が発生したり、次の展開がちよこちょこっと見えてくることあるんです。ゲストハウスをやったことによって、神戸のデザイン会社が、サテライトオフィスを整備してくれるようになったり、その隣にある空き家で、バイオリンの製作工房を作ろうとしてくれています。レハンに始まったゲストハウスの動きが、これらに繋がっていていますので、何らかの動きを続けていきたいというのが、今の現状です。

図司／なるほど、ありがとうございます。前向きな動きをうまく作りながら、これまでの伝統みたいなところも、どうやって続けていくのか、多分そこは必ずしも別々じゃないよというお話でしょうかね。ありがとうございます。川島さんいかがでしょうか。

川島／集落支援員は1年更新ということで、毎年、今年も雇っていただけたな、ぐらいな気持ちもあったりするんですね。集落の方からも、あんたこの仕事は何か任期があるんかとか、ずっとおれるんかとか、おれるんやったら、ずっとおつてよ、みたいな話はいただいたりもするんですけど。何か自分の中でも危機感というか緊張感みたいなものは持って仕事をするのは大事なのかなとは思っています。もし自分が辞めなければならない状況とか、辞めたくなくなったりしたときにどうするかということも、たまに考えるんですけど、もし、集落支援員というシステムを市がやめるってなった時にもうしょうがない。ただ、「たのしいな」として何か活動が残っていく状況になった時に、それでも関わっていける場として、しいな遊海くらぶを作ったという一面もあります。私がただの椎名の地区の住民として、そこで活動ができるような場を作っておこうみたいな、自分の中のセーフティネットのつもりで作りました。別に行政と関係が悪いとかじゃないんですけど、全部信用はしてはならないなと正直思っていて。課長が変わったときに、他の場所で急にいろんなことが変わってしまった事例とか、地域おこし協力隊員の子が、行政の方とのやりとりで悩んでいるのとかもたくさん見てきて、自分なりの防衛策でしょうか。そもそも夫が漁師になるというので、この地に来たので、実際魚が取れなくなったり、大敷自体がつぶれてしまうということが起きるかもしれないというのは考えたりはしております。

図司／ありがとうございます。様々な目線で、今後を見据えてのお話をいただきましたが、先ほど控え室のところでも、高齢化なり、人口が減ってくると、やっぱり福祉的な要素が求められる集落支援員の役割について、先ほど出てきましたけれど、田口先生どうですかね。今の皆さんの話とか、福祉的な話、活用みたいなところも含めて。

田口／これから集落は縮退していくし、少子高齢化が進んでいくことを考えると、やっぱり福祉的要素は当然強くなってくと同時に、先ほど川島さんおっしゃったように、政策なんですよね、政変が起こると課がなくなる可能性がある。特に市町村の場合は、政権交代が割と起こりますので、そのときにどうなるか。特にその地域の目玉施策とかになっていけばなっているほど、政権交代の影響を受けやすいところがあって、そこはすごい危機感を僕は持っています。国の中での制度が大幅に突然変わるってことはそうないにせよ、地域では結構ありますよね。選挙の時に集落支援員どうよという話になってですね、対抗馬が勝って集落支援員が止められちゃうみたいな事例が実際、起こっています。1番迷惑を受けるのは地域なので、その中で気にしなきゃいけないことは、集落

支援員の皆さんが活動する中で、いなくなってもこれが残ればいいのか、地域側の主体的な動きみたいなものを、どう創り出しながら活動していくかというところは、結構大事だなと思うのがまず一つですね。もう一つは集落支援員を継続するかといった時に、キャラクターがすごくある気がするんです。例えば、最初の地域おこしが得意なタイプの若くて元気がいい子が、コロナで止まったものを再開するときって、どっちかっていうと実直性なんかよりも、やっちゃおうぜ!みたいな機運づくりが効いてきたりするんですね。そういうキャラクターの人と、いやいやこれはちょっと実直、慎重に進めなきゃいけないマネージャー型っぽい人と、多分キャラクターが違って。行政として、この地域はどういう状況にあるから、どういうキャラクターの人たちが向いているかどうかという判断が必要です。

～スライド表示～

これちょっと前に僕作った、ものすごい情報量が多すぎて皆さんから怒られる図なんですけれども、地域おこしのフェーズと、そこにどういうキャラクターが、どういう施策がっているか。今日のテーマである集落支援員以外にも、地域おこし協力隊もあるし、関係人口もあるし、それ以外の例えば近くの大学生との都市農村交流或いは地域おこし協力隊のプロジェクトマネージャーもある。こういったことはどのフェーズにフィットするかという辺りをちゃんと整理しながら、やらないといけないなと思って、こんな図を作っているんです。一番下に行政の役割は結構大変ですよ、というのを書いています。行政的に協力隊や集落支援員を入れると、ちょっと仕事が楽になると思っちゃう方がいらっしゃるんですけど、いやいや実はもっと大変ですよ、もっと言うと、今の状況で複雑化しているんで、むしろ職員が力量が問われているというところを表現しています。この図は最近出した『少人数で生き抜く地域をつくる』って本の中に載せていますので、興味あったら、そこをご覧いただければいいかなと思います。フェーズとかキャラクターとかと地域づくりっていうものをちゃんとリンクさせて、こういった人的支援を打っていただけるとありがたいという意味で最後にこういう図を出させていただきました。

図司／ありがとうございます。この話は我々も今ちょうど議論途中のところもあるので、これからバージョンアップはされていくと思います。今日のお話でも、支援員なり集落対策のそれぞれの局面でどう展開していくのか、いろんな形で皆様からお話いただいたかなと思います。では、質疑の時間が取れそうですので、御覧の皆様から、ど

パネルディスカッション 「集落の暮らしを未来へつなぐ ～縮退する過疎集落に向き合う現場での取組と課題～」

なたかにお伺いしたい、或いはこのテーマでもう一度議論し
て欲しい、みたいなところがあれば、いかがでしょうか。

参加者／先程、地域に主体性をどう作っていくかという話が
最後にあったかと思います。特に過疎集落の中での地域づく
りで、“行政”が一つ大きなきっかけになると思うんです
けど、行政主導というか、行政に言わされている感を持って
いる住民も出てきてしまうのかなと思うんですけど。どうや
って地域住民を巻き込んで主体性を持たせているか、聞きた
いです。

図司／ある意味、根っこの話ですね。冒頭の田口先生から
の投げかけのところになりますが、どうでしょうか皆様。最
後、田口先生にもう1回戻しますけど。小玉部長いかがで
しょう。行政の立場から、それぞれのお立場から見える世
界が当然あるかと思いますが。

小玉／集落においても、集落の規模の違いもあります。そ
れから先ほどいろんな事例を報告しましたが、担い手がいる
ところもあれば、担い手がおらず福祉的な施策の必要性が
高いところもあります。いずれにしても、その地域の実情
は何か把握する必要があります。その把握するのは行政
であって、行政が把握する方法というのは行政なりの戸別
訪問であったり、会合であったりします。そういった中で、
その地域が今必要とするものは何かを把握することだと思
います。

これは言う・言わせるというよりも、必然的に職員とその集
落の方達が関わりを持つ中で組み上がっていく、掴んでい
けるものだと思います。そこでの不便さ、そういう思いに
関してどんなことをチャレンジしているか、どういう取り
組みをしていこうかということで、行政と集落との協働、
二つの協働の間に、集落支援員をはせて、三つの共同
体で集落支援を進めていくという考えです。この共同
体での集落支援が進行する中で、それ以外にも関係する
方たちが増えてくると思います。いろんな協働の主体が、
地域づくりや集落づくりに関わってこられると思いま
す。このような形での集落支援、地域づくりを進めてい
くのがいいのかなと思っております。

図司／その流れで小島さん、いかがでしょう。OBの立場
でもありますが、両面見える世界かもしれない。

小島／市役所職員OBとして、自治協という中間組織
的なところに行っているんですけど、そこから市役所を見
ますと、どうしても市役所というのは、二元代表制です
から、職員はいろんなところに顔を向けなければいけ
ません。自治協にいる

立場からすると、どっち向いて仕事しとんやろな、と
思うこともあるわけですね。職員は大変やなと。です
ので、地域のことは我々がするわ、ということも思
います。自治協がやる方が、早く意思決定ができる
ということもあるわけで、田口先生が言われる自
立した組織になって、逆に自治協が市役所の仕事
をもらいますという感じになればなと思います。その
ためにも、事務局の機能がやはり大事で、そこに
集落支援員のような立場が位置付けられて、有効
に活かしていくことが、今後の地域を維持する上
での方向性かなというふうに、朝来市の場合は思
います。

図司／ありがとうございます。川島さんいかがですか。

川島／「たのしいな」の場合は、集落活動センターのシ
ステムを使って盛り上げていこうというのではなく、ど
ちらかという県とか市の提案があって、市として集
落で話し合いをして、じゃあやろうという形になっ
たんですね。提案されて始めた部分があるんですけど、
それが私の中でもすごく葛藤であり悩みであり、ず
っと引きずっているところですね。住民との関わり
の中で、受け身になっちゃっている部分があると思
います。どうやって主体性を持たせるかが本当に悩
みのところなんですけど。だから、やりたい人しか
来ないでくださいというスタンスではあります。

一番わかりやすいのは子供なんですね。子供達は
やりたいことをやり出すと、本当に主体性を発揮
して、どんどんこっちの予想を超えていくんです
ね。そういうのを実際に体感していて、それを住
民に見せる意味も込めて、たのしいなこどもク
ラブをやっています。子供が自分の気持ちに素直
にやりたいと思ってやっている姿を見せたら、大
人たちは恥ずかしくないですかという気持ちも込
めてやっています。

しいな遊海くらぶでも、講師のおちゃんたちが
人に物を教えたり、観光客の人に案内をして、め
ちゃくちゃ面白いんですねとか、そんな文化が
残っているのすごいね、そういうふう
に言ってもらえることで地域の誇りを取り戻
します。もともと誇りも愛着もあるんですけど、
みんながどんどん外に出て人が減っていくと、
昔のにぎわいがなくなって自信も全然なくな
ってしまっています。幾らこっちが、中の人とし
てこれすごいんです、絶対売れますよ、これは
面白いんですよと言っても、なかなか納得し
てくれないんですけど。外から来る人に言
っていただけることで、自信を取り戻して、自
分からいろいろ提案をしてくれるようになるん
ですね。そこをどう活かすか、そのつづきと
か声をどれだけ私は拾って育てるかという
のが大事かなと思っています。

図司／ありがとうございます。では田口先生。

田口／僕はやっぱり主体性を作る最大の要因は、楽しさだと思っているんです。楽しいことはさっきの子供の話じゃないですけど、やるんですね。これは、行政のものの持って行き方にもよるんですけど。例えば、ここのペットボトルに水を容れたいと思ったときに、時々ね、こっちの方向に向けたいっていうと、いろんな水をかき集めて漏斗でこん中に集めようとする、ここに集約しなさい、行政がやりがち。こうするとやらされ感がどうしても出て。行政の皆さんには、でっかいお盆を用意していただいて、お盆からこぼれなさい、その中は自由にやったらいいですよ、ぐらいい感じにしておかないと、やっぱり面白くないんですね。卒論に取り組んでいる大学4年生だって、早く卒論書きたいな先生のプレッシャーがあると、進まないんですよ。それが、ある時に研究の楽しさに気づくと、勝手にやり始める。これは人間の性で、だから趣味は続くけど、仕事は続かないっていう感覚がある。いかに地域の皆さんの楽しさを尊重できるか。地域から上がった声をどうするかというときも、デザインしすぎないことが結構大事です。徳島のうまくいった協力隊員から言われたんですけど、完璧に仕上げるんじゃなくて、隙間をいっぱい作って、いろんな人たちの居場所と出番がきちんと用意することができれば、どんどん主体性が出てくる。ただそれを全部コントロールすればするほど、主体性が出てこない。そのバランス感覚みたいなのは、僕は楽しさにあると思っているので、その楽しさをつくれる器、お盆をどう用意できるかが、すごく大きなポイントなんじゃないかなと思っています。だからこうあるべし、って形を持ってそれを目指しちゃいけない、ケラケラ笑いながら、あとで結果としてこれって地域づくりだよねと言えればいいんですよ。その地域づくりの視点から評価すればいいわけであって、地域づくりドストライクにやりなさいというのは小難しいだけの話ですから、なかなか主体性は育たないかなと思っている。ぜひ楽しさというのを大事なキーワードにさせていただけるとありがたいなと思います。

図司／はい、ありがとうございます。そういうきっかけをどこに作っていくのかということですよ。だから、先ほどの川島さんの「たのしいな」の話も確かに、県なり、行政の方からは振りかけられたけれども、やっぱりそこにどう楽しさを生み出していくのか。それはある意味、順番はいろいろありうるところだと思うので、本質はどこなのか、というところを皆さんから語っていただいたんじゃないかなと思います。ありがとうございます。良いテーマを投げかけていただきありがとうございます。

参加者／こちらこそ、ありがとうございます。

図司／はい。もう1人行けるかな。

参加者／最後の方で話に出たんですけど、どうしても今後の集落の行く末ということになると、福祉的なところが今からすごい重要になってくるなって思っています。我々県の立場からすると、住民の方々に、例えば高齢者の移手段であるとか、買い物など、将来を考えて欲しいなと勝手に思っていますが、なかなかそっちの方に目がいかない。そこにちょっと目を向けてもらうにはどうすればいいか、もしご意見等あれば、教えていただけないかなと思いました。

図司／ありがとうございます。暮らしの課題に対して、ある意味、集落対策だったりとか地域運営組織みたいなものがどう向き合っていくのかってところでしょうか。これもいろいろ皆さんお考えなり現場の様子はあるかと思うので、小玉部長からこれもいいですか。

小玉／行政の方なので、地域の実情をよくわかったご質問などと思います。福祉的な視点は大事だと思いますが、この集落支援員制度に関しましては、あまり福祉的な視点を取り込みすぎると、社会保障部局の地域包括制度であったりとか、福祉委員制度だったり類似の制度とバッティングする可能性があるかなと思います。ただ、集落支援員さんの活動は、個別訪問型の集落点検をしていますので、その中から個別相談的なものは幾つも上がってきます。それは社会保障部局に届けていくってということで、連携は取れているかなと思います。

私のところの実例でいきますと、集落点検は本当に隔々におられる方たちの声を拾い上げることができます。生活インフラの問題、特に買い物の問題であったり、移動支援であったり、医療であったり、あとは地域の清掃作業であったり、そういった活動ができないという声も幾つも上がってきます。そういった声を集約し、行政側が集約することで、制度化出来ているものもあります。買い物支援に関して困っている集落が多々あるとなったときに、移動支援としてそこまで行くタクシー券を配布するのは、福祉部局の制度です。地域づくりの視点からすると、そこに商店を持っていくことは無理だとしても、移動販売という形で実現することはできると思います。

岩国市の場合ですと、移動販売に関する助成制度を設けています。ガソリン代燃料費の支援、それから車両の改造費の支援があります。こういった中で、生活インフラを近づけていくというのは地域づくりの観点で進めていくべきものかなと思います。

あとは、自治会活動とも密接に協調していますので、集落活

パネルディスカッション 「集落の暮らしを未来へつなぐ ～縮退する過疎集落に向き合う現場での取組と課題～」

動に関しましては奉仕作業であったり、地域行事であったり、そういったものを支援する仕組みとして、お助け隊、ボランティア活動といったものを制度化していく、財源手当していくことが考えられるかなと思っております。

図司／ありがとうございます。小島さん、いかがでしょう。

小島／自治協は五つの部会があるんですが、ふくし部会が、役員の成り手がいないということで課題になっていますが、いくの自治協は現在42%の高齢化率の地域です。いきいき部会で、ウォーキングトレインをやっていますが、ウォーキングトレインに参加してる人ってほぼ65歳以上なんです。特にふくし部会の活動としなくても、自治協で取り組む事業は、すべて福祉施策やというふうに統合的に考えていく方が、よりいいんじゃないかなと思うんです。福祉、福祉って考えると、社協が取り組む事業も既にありますし、何をしたらいいのかと、詰まってしまうのではと思うんです。なかなか成り手がいないということよりも、今やっている部分はすべて福祉施策ですよ、というふうに認識したほうがより効率的ですし、あえて、ふくし部会の活動ということ、声高らかに言わなくても良いのではないかと、最近思っているところです。

図司／ありがとうございます。ウェルビーイングの話にも繋がりますかね。川島さん、お願いします。

川島／着任当時、ごみ出しを大変苦労されている、ちょっと足の悪いおばあちゃんを見て、何かやらなきゃいけないかなとか、ここの部分をどうにかしたいな、という福祉的な課題はたくさん見えたんですけど、全部自分ができるわけじゃないなというのを感じました。げんきクラブに来てくれているおばあちゃんに、ちょっと認知症の気が出てきたら、社会福祉協議会に連絡してみたりとか、そのメンバーさんで見守るようにしたりとか、ちょっとした手助けとか気づいたことをどこか関係のところにつなげていくようなことはしているんですけど、全部を背負うっていうのはやっぱり、やめました。ただ、ごみ出しについては今後すごい課題になってくるかなというのを感じています。高齢者のごみ出しが大変で、ごみ屋敷になるケースであるとか、そういう新聞記事を拝見しましたが、それを行政で考えていくのか、福祉の方で考えるのか、集落活動センターがあるからそこで考えるのか、話をしながら進めていきたいです。手助けしたいという人もいたりするので、連携をとりながら、何かできる方法を模索したいなと考えています。

図司／ありがとうございます。田口先生どうぞ。

田口／時間もないので手短かに言いますが、一つは集落点検で、集落点検の弱点は現在の状況の点検なんです。地域の皆さんは現在のことはもうわかっているんで、なかなか行動に結びつかない。私は、実は10年後の姿を地域の皆さんと描こうとしています。そうすると、今年2023年ですけど、ちょうど団塊の世代の皆さんが後期高齢者に移り変わっているタイミングで、これまでの10年とこれからの10年って相当状況変化が起こると思っています。だから本来ならもう5年ぐらい前にやりたかったんです。戸別訪問型の集落点検だと、なかなかその将来予測はしにくいんですが、単純に地図に、現在と10年後の戦力図を地図にシールで貼っていくんです。どの家に何歳の人がいるといったように。これで、現在と10年後の地域の様相の変化を、こっちが示すんじゃないかと、住民の皆さんが貼りながら気づいちゃう。こうすると、今やらないとやばいになっていくことに地域の皆さんが気づけるかなと僕は思っています。僕それを「心を折らない程度の危機喚起」と呼んでいますけれども、そういう仕掛けをやっていかないと、皆さんで考えるきっかけがないんですよ。だからこれは、農水省の地域計画を作るということの一つの言いがかりにして、全地区でとりあえず10年後の姿を描いてみようよと言うと、あっと気づくところはかなり出るんじゃないでしょうか。で、ただ逆に、もうちょっと駄目かも思っちゃう地域がひょっとしたら出てくるかもしれない。そのフォローは前提としながらも、ちょっと未来の姿をどうリアリティーを持って描けるかということが、ハッと思わせる時のきっかけとしては有効かなと思って、今そういったことをあちこち取り組んでいる状況です。

図司／はい。よろしいですか。

参加者／ありがとうございました。

図司／はい、ありがとうございました。ちょうどいい時間になりました。

最後になりますが、集落対策、或いは集落支援員の仕組みに関して、今日はいろんな角度から話が展開しましたので、まとめは難しいかと思いますが、ただ先ほど小玉部長も言われましたけれども、出発点は地域の皆さんと向き合って話なり、様子をちゃんと見つめ直すというところかなという気がします。昨年度の集落支援に関する過疎連盟の報告書に、私からも、集落対策を諦めないというフレーズを入れました。集落点検も1回やってそれでおしまいみたいな雰囲気になってしまうところあります。先ほども控室で話していましたが、定年退職をする予定だった皆さんが定年延長で地域に戻ってきてないということが、就農の問題であったりとか、

パネルディスカッション 「集落の暮らしを未来へつなぐ ～縮退する過疎集落に向き合う現場での取組と課題～」

集落の自治協みたいなどころの担い手問題に、これからはね返ってくるんだと思うんですね。そういうことも含めながら、あとは全体的な高齢、団塊世代のリタイア、引退という話も出てきますので、かなり様変わりする局面に入ってくるんだらうと思います。

それを見据えたときにやはり先程、田口先生言っていたきましたけれども、地域の皆さんの中での不安のあぶり出したいな作業をどういうふうに丁寧にするのか。その入口はやはり行政の皆さんと地域の皆さんの向き合い方みたいなどころからでしょうし、あとは田口先生にも今日お話いただきましたが、集落とか地域の人達だけで頑張っってねというような時代でもなくなってきているということもありますし、昨日からの議論もそうですが、移住者の方と或いは関係人口で関わる人たちの存在というのも過疎地域にとっては大分こう見えてきたところもあるかなと思います。

そういう意味で、集落対策のあり方というところを、今一度現場の方で見つめ直していただき、また私とか田口先生はそういうところにお手伝いにもまた馳せ参じたりもしますし、今日皆さんとディスカッションする中で、いろんなものが見えてきたと思います。それぞれの地域に合わせたところでお持ち帰りいただきつつ、また議論を深めていただければ、この分科会として開催した意義があったかなと思っております。

それでは、これで第3分科会を閉めさせていただきます。改めて、皆さん方に拍手をもってお礼に代えたいと思います。どうもありがとうございました。



過去開催地

第1回(昭和63年)	鹿児島県	21世紀を拓く地域おこし ～過疎地域の再生と活性化のために～
第2回(平成2年)	秋田県	明日を築く地域おこし ～過疎からの脱却をめざして～
第3回(平成3年)	兵庫県	今、過疎新時代 ～その大いなるポテンシャル～
第4回(平成4年)	島根県	過疎 ～新しい思想を求めて～
第5回(平成5年)	岩手県	明日の過疎地域を拓く ～イーハトーブからの提言～
第6回(平成6年)	高知県	新・いなか創造 ～自立と挑戦～
第7回(平成7年)	新潟県	近き者よるこび、遠き者来るまちづくり
第8回(平成8年)	広島県	豊かさ実感 ～魅力と誇りの創造～
第9回(平成9年)	北海道	未来へつなぐ地域づくり ～新たな国土のフロンティアとして～
第10回(平成10年)	岡山県	21世紀に挑戦する過疎地域 ～新しいライフスタイルに対応した地域の活性化～
第11回(平成11年)	福島県	新たな時代の過疎対策 ～21世紀の真に豊かな国民生活実現のために～
第12回(平成12年)	岐阜県	自立と美しく風格ある地域づくり ～豊かな自然・文化・生活の創造～
第13回(平成13年)	大分県	自立への新たな視点 ～地域資源を活用し、自立した地域を創るヒント～
第14回(平成14年)	山形県	地域づくりへの新たな挑戦 ～過疎地域の自立と「公益」的役割～
第15回(平成15年)	宮崎県	小さな地域からの変革 ～住民参加による地域の新たな価値の創造と発信～
第16回(平成16年)	和歌山県	新たなふるさとづくりを目指して
第17回(平成17年)	徳島県	変革の時代における地域づくり
第18回(平成18年)	宮城県	地域の共生、新たなステージへ ～交流居住の時代～
第19回(平成19年)	福岡県	ふるさとの価値を見つめ直す ～自立と連携・交流による地域づくりの展開～
第20回(平成20年)	石川県	次代に引き継ぐ愛着と誇りの持てる地域づくり ～都市と過疎地域の互惠・共生～
第21回(平成21年)	長野県	時代に対応した新たな過疎対策 ～日本の原風景 文化、文明を育んだ過疎対策をどう守る～
第22回(平成22年)	東京都	過疎 新時代 ～都市と過疎地域の新たなパートナーシップの構築～
第23回(平成23年)	愛媛県	過疎地域の底力 ～地域再生への新たな決意～
第24回(平成24年)	愛知県	過疎地域でともに歩む ～外からのサポートと内なる価値～
第25回(平成25年)	長崎県	過疎・離島・半島っていいね! ～本物の価値、コミュニティの知恵、そして誇り～
第26回(平成26年)	三重県	過疎地域の未来に向けたイノベーション ～つながり、持ち寄り、支え合う「ふるさと」～
第27回(平成27年)	香川県	過疎・離島で輝く ～地域の資源を磨き、交流を生み出す～
第28回(平成28年)	奈良県	訪れたい、住みたい、住み続けたい地域 ～過疎地域で幸せな暮らしに出逢う～
第29回(平成29年)	佐賀県	人が輝く地域づくり ～自発と誇りが地域を変える～
第30回(平成30年)	山口県	田園回帰 ～地方に若者を呼び込む～
第31回(令和元年)	青森県	地域の食・文化・人を育む「農山漁村」を守る ～経済を回して維持・発展する仕組みづくり～
第32回(令和3年)	高知県	過疎地域の持続的な発展をめざして ～高齢者の暮らしを守り、若者が誇りと希望を持てる地域づくり～
第33回(令和4年)	熊本県	過疎新時代 新しい時代の流れを力にする ～創造的復興の現場からメッセージ～

全国過疎問題シンポジウム実行委員会事務局

〒930-8501 富山県富山市新総曲輪1番7号

富山県地方創生局ワンチームとやま推進室 中山間地域対策課内

TEL:076-444-9607 / FAX:076-444-4561 / E-MAIL:achusankan@pref.toyama.lg.jp